

オーウェン主義の完成

——『ラナーク州への報告』を中心とする

オーウェンの経済思想——

松 田 弘 三

—

産業革命とよばれる大規模な経済的変動の過程は、必然的に深刻な社会構造の变革をとめない、あたらしくうみだされると同時に苦難の淵に投げこまれた労働者階級は、しばしば暴動的な形態をさえとりつつ、資本の苛酷な搾取からの解放のための闘いを開始した。なかんずく、ナポレオン戦争の終結にともなう、一八一五—一七年の恐慌とそれにつづく不況の時期は、イギリス資本主義が直面した最初の危機であり、社会的・政治的な激動の数年間であった。

一八一—一二年のラダイト（Luddites 機械破壊し）運動の弾圧ののち、一八一五年ごろからイギリスの労働者階級にたいして大きな影響力をもったものは、ロベット（William Cobbett）らの指導した急進主義的な議会改革運動であったが、それはスペンス主義者（Spenceans）の騒擾とむすびつけられて、はげしい弾圧をこうむつた。

他方、一七九九年と一八〇〇年の結社禁止法にもかかわらず、労働組合運動は非合法のうちに工場と鉱山の労働者たちのあいだにひろがり、地域的なストライキが瀕発した。とくに一八一八年のランカシャーの大ストライキは、資本家階級を震撼させた。このストライキの敗北後議会改革運動に転換した、繊維工業労働者たちの示威集会に騎馬警察隊が襲いかかって数百人の死傷者をだした、一八一九年八月十六日のマンチェスターにおける「ピタール」(Peterloo)の虐殺は、産業革命確立期のイギリス社会の暗黒面を象徴するものであった。この虐殺にたいする全国的な抗議の嵐は、政府にさらに徹底的な弾圧政策——シックス・アクト六条令——をとらせ、それはまた反射的に急進主義者の一部を暴力的行動——一八二〇年のカトー街陰謀事件——にかりたてた。

このような激動する社会状況のもとに、イギリスの社会主義は一八一五年の平和の直後に生まれたといわれるが、この時期の社会主義とはオーウェン主義の同義語にはかならなかった。そしてオーウェン主義の社会主義ないし共産主義的思想体系としての完成をしめすものが、一八二〇年五月一日のラナーク州総会に提出された、ロバート・オーウェンの『ラナーク州への報告——貧民と労働階級の性格を本質的に改善し、彼らの状態を改良し、生産とおなじ規模をもつ市場を創造するであろう秩序のもとに、貧民と労働階級に恒久的な生産的雇用をあたえることによつて、公共の困窮を救助し不満をとりぞく計画についての——』(Report to the County of Lanark, of a Plan for relieving Public Distress and Removing Discontent, by giving permanent, productive Employment to the Poor and Working Classes, under Arrangements which will essentially improve their Character, and ameliorate their Condition, diminish the Expenses of Production and Consumption, and create Markets co-extensive with Production.) であつた。

オーウェンにこの報告書を書く直接の動機をあたえたものは、彼の工場があるニュー・ラナークがそれにふくまれるラナーク州の困窮であった。オーウェンによれば、一八一九年のピールの金兌換再開にかんする法令の結果、二度目の恐慌が勃発し、はなはだしい困窮が人為的にうみだされ、何万という労働階級の人々が失業して飢餓にひんしたとされているが、全国の諸地方のうちで、とくにラナーク州は貧窮のどん底にあり、失業者の過剰に苦しんでいたのである。この年カトー街陰謀事件と呼応して蜂起したポニーミーアの反乱は、ここが中心であった。しかるにニュー・ラナークの住民のみは、困窮も不平もなく、しかも二十年間それが少しもなかったことが注目されて、オーウェンは、ラナーク州総会から、困窮の原因と救済策について意見をのべることを求められたのである。⁽²⁾

しかし『ラナーク州への報告』の内容は、州当局の要求をはるかにこえて、社会改革の原理と実践計画との全面的な展開となっている。すなわち、本書は、オーウェンの社会思想のもっともすぐれた成熟した表現であるが、とくに注目すべきことは、彼がこの書において、その「経済思想をもっとも完全にのべている」⁽³⁾ことである。またそのなかで、彼のプランは、もはやさきの『工場労働貧民救済協会委員会への報告』(Report to the Committee of the Association for the Relief of the Manufacturing and Labouring Poor, 1817)におけるように、⁽⁴⁾たんに失業救済のための対策としてではなく、とって代るべき社会秩序の基礎として、⁽⁴⁾えがきだされている。

(1) G. D. H. Cole, *A Short History of the British Working-Class Movement*, p. 43. 林健太郎ほか訳、ユール、イギリス労働運動史Ⅰ、七三―七四。

(2) *The Life of Robert Owen*, written by himself, Vol. I, pp. 233-234. 本位田祥男・五島茂訳、ロバート・オーウェン

自叙伝(下)、世界古典文庫、一七〇—一七一ページ。ポニーミュージアの反乱については、五島茂、ロバート・オウエン著作史、一〇二ページ、参照。

(3) ローゼンベルグ、直井武夫・広島定吉訳、経済学史、二巻、三六二ページ。

(4) G. D. H. Cole, *The Life of Robert Owen*, p. 222.

本書はつぎの三部からなる。

第一部、序説。(初版、一九ページ)

第二部、プランの概略。(同、一〇—二二ページ)

第三部、プランの詳細。(同、二三—六〇ページ)

オーウェンは、「第一部、序説」を、つぎのように説きおこしている。すなわち、現在みられるところの「労働者家族を十分に支えるような賃銀における、共同社会^{コミュニティ}にとって有利な、雇用の全般的欠乏」と「その結果としての公共の困窮」とは、いかにして生じたのか。それは、過去半世紀のあいだに大英国のすべての工業部門に導入された機械的発明にもとづく新しい生産力の急速な増大——この機械的生産力は、大英国の全人口の筋肉労働の「少くとも四十倍」と見積られている——にもかかわらず、社会がこの生産力を「適切に利用しうる秩序⁽⁵⁾ (arrangements) をつくらなかった」からである。このような新しい秩序こそ、彼のプランであり、協同村であるのであるが、彼はこの計画を提案する前提として、まずつぎのような原理をあきらかにしている。

「第一に、肉体労働 (manual labour) は、適切にふりむけられれば、すべての富と国民的繁栄との源泉である。第二に、適切にふりむけられるときには、労働は労働者をかなり安楽に維持するに必要な費用よりも、はるか

に多くの価値を社会にもたらすものである。

第三に、肉体労働は、適切によりむけられれば、将来幾世紀ものあいだ、考えうる人口増加のもとにおいて、世界のすべてのところにおいて、この価値（労働者の生存費以上の価値）を永続的にもたらしうるだろう。

第四に、肉体労働の適切なふりむけのもとにおいては、大英国とその属領とは、その無限の人口増加を、すべての住民にもっとも有利なように、支えうるだろう。

第五に、肉体労働がそのようにふりむけられれば、人口は、多年にわたって、社会がその増加によって利益をうる程度以上にすみやかに前進するようには刺戟されえない、ということがみいだされるだろう。⁽⁶⁾

オーウェンは、これらの考察が、「経済科学の第一のかつもっとも明白な諸原理からひきだされた」⁽⁷⁾ものであるとしているが、このような経済理論は従来のオーウェンの諸著作にはみられなかったところであって、あきらかに彼が、一八一七年に出版されたリカードの『経済学および課税の現理』(On the Principles of Political Economy and Taxation)において確立された労働価値論を、学びとったことをしめすものである。⁽⁸⁾もっとも、第一項はたんに労働が富すなわち使用価値の源泉であることをいっているにすぎないが、第二項は労働が価値をつくりだすことをのべているばかりでなく、それが労働者の生活維持費以上の価値、すなわち剰余価値をも生産することをしめすものであって、注目に値いするのであろう。

すべてのばあいにつけられている、「適切にふりむけられれば」という限定も、使用価値を生産しない労働は、労働として計算にはいらぬという意味でならば、誤りとはいえない。しかしながらオーウェンの主な関心事は、第三項以下にみられるように、労働が世界の全人口を養うに必要なより以上の富をつくりだしうるし、また現に

つくりだしているという事実の強調にあったとおもわれる。そのかぎり彼の叙述は、労働価値論としてはかなりあいまいなところをのこしているといわれなければならない。もっとも、彼の価値論は、つきにみる彼の「人間労働本位制」の主張に関連して、いささか深められているけれども。

(15) R. Owen, Report to the County of Lanark, A Supplementary Appendix to the Life of R. Owen, pp. 263-265.

(16) Ibid. p. 264.

(17) Ibid.

(18) エンゲルスもいう。「オーウェンの全共産主義は、経済学的・論戰的に登場するかぎりでは、リカードゥに立脚する。」(Vorwort zu Das Kapital, Bd. II, S. 14. 長谷部文雄訳、資本論第二卷、二三ページ)と。オーウェンをリカードゥの經濟理論から社会主義的な結論をひきだした人々の先駆とみなす、のちの議論のために、この点を留意されたい。

(19) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 45. 長谷部訳、第一卷、四五ページ、参照。マックス・バーンは、この箇所を「正しく指導された」と理解して、それをオーウェンの指導者意識に帰している (Max Beer, A History of British Socialism, Vol. I, p. 162. 加田哲三訳、英国社会主義史)、一九四ページ)けれども、正しい解釈とおもわれな。

つづいてオーウェンは、全人口が生産力の増大からひきだされる利益にあずかるような秩序をつくりだしようということの論拠を、つぎの点にもとめる。まず、「科学的または機械的かつ化学的な力にたいする、あらゆる追加の直接の効果は、富を増大させることである。したがって、労働階級にたいする雇用の現在の欠乏の直接の原因は、あらゆる種類の富の生産過剰であり、それによって、商業の現在の秩序のもとにおいては、世界のすべての市場は、在荷過多となっている、ということがみいだされる。」したがって、「労働階級にたいする雇用の不足は、富あるいは資本の欠乏から生ずるのではなく、また現存の富や資本に大きな追加をなしうる手段が欠けて

いることから生ずるのもなくて、新しい資本のこの大きな追加を社会をつうじて分配する様式に欠陥があることから、あるいは、商業的にいえば、市場の欠乏から、または生産の手段と歩調をあわせる、交換の手段が欠けていることから、生ずるのである。⁽¹⁰⁾」

このことは、たしかに、現存社会の欠陥は、生産関係にあるのではなく、流通・分配関係における欠陥にあるという、皮相な見解をしめすものというべきであろう。そしてこのような見解から、オーウェンは、つぎにみるような価値標準の変更、すなわち労働本位制を、社会的害悪を除去するための方策として、提案するにいたつたのであろう。それは彼の経済理論の弱さをものごたるものである。しかしオーウェンには、彼の恐慌観についてみたように、機械の資本制的利用が生産と消費との矛盾をひきおこすというような、資本制生産様式の基本的矛盾の認識がみとめられるのであって、彼の思想が全体として、資本制生産関係の矛盾をとらえなかつたとはいえないとおもう。⁽¹¹⁾

(10) Owen, Report to Lanark, Life of Owen, Ia., pp. 265-266.

(11) 拙稿、オーウェン主義の成立、立命館経済学、第七巻第四号、一七、一九ページ参照。

(12) 『協同思想の形成』の著者平実氏は、つぎのようにいわれる。「オーウェンは、社会的弊害の発生は分配関係から生じ、貨幣はこの分配関係の欠陥を蔽いかくすものであるから、貨幣がなくなれば、分配関係の欠陥が曝けだされ、その匡正が可能であるとし、したがって、社会的弊害の発生は除去しようと考えるにいたつた。」（同書、一九七ページ）と。まことに労働貨幣論発生の想源をついたするどい指摘であるというべきであろう。ただオーウェン経済思想の全体的評価については、「彼は社会的窮乏の原因を生産過程にて理解することをなしえず、分配過程において求めるようなことになつたのである。」（同書、一九五ページ）と断定される氏に反して、わたしは本文のように考えるものである。

そこで、オーウェンは、現在の困窮をとりのぞき、国に繁栄をもたらすための、方策の一つとして、「価値標準における変更」(a change in the standard of value)を提案している。従来文明世界において、金銀が価値標準として用いられてきたが、これらの金属はたんに人為的な標準であり、「このような価値標準の導入は、すべてのものの内在的価値(intrinsic value)を人為的価値(artificial value)にかえ、そしてその結果、それらは社会の一般的進歩をいぢるしくおくらせたのである。実にこの意味において、『貨幣は、すべての害悪の根源である。』⁽¹³⁾と云つてよいほどである。」

それはかりでなく、これらの金属はもはや、急速に増大した富を實質上代表しえなくなった。一七九七年の金兌換停止は、そのあきらかな証拠である。しかしそれにかわつておこなわれたイングランド銀行券を法制上の価値標準とする処置は、社会の繁栄と福祉を一商業会社の恣意にゆだねる、きわめて危険なものであった。かくしていまや、以前の人為的な標準——金本位——への復帰の準備がすすめられている。しかし金銀は、すでに一七九七年に、大英国の富を代表するには不適當であることが証明されたものであり、したがって、富がはかり知れぬほど増大した現在では、その目的のためになおいつそう不適當なものである。したがって、それへの復帰を企てることは、農業・商業・製造業を沈滞させ、労働の価値を下落させ、社会全体を困窮におとし入れるのである⁽¹⁴⁾。

このオーウェンの思想には、混乱があるようにおもわれる。彼は、価値標準という概念において、価値の内在

的尺度と外在的尺度とを混同している。彼は、金銀は人為的な価値標準であり、それによってすべてのものの内在的価値が人為的価値にかえられたというが、金はそれに労働が投じられ、したがってそれ自身価値を有するがゆえにのみ、商品の価値を外部的に表現しうるものであり、それが価値尺度としての貨幣の機能なのである。

(13) Owen, *ibid.*, *Life*, I, A, p. 266.

(14) *Ibid.*, pp. 266-267.

それでは、オーウェンは、金銀のかわりとして、いかなる価値標準を提案しようとするのか。それは「人間労働本位制」である。彼はいう。

「価値の自然的標準は、原則として、人間労働である。あるいは、活動状態にある、人々の結合された筋肉と頭脳との力である。そして、この原理をただちに実行にうつすことは、大いに利益があるであろうし、現在絶対にならなければならない⁽¹⁵⁾。」と。

つづけてつぎのようにいう。「この問題について、皮相なあるいは中途半端な見解をとる人々によって、人間の労働あるいは人間の力は、各個人について不均等であるから、その平均量は測定しえないということが、いわれるだろう。しかしながらすでに、人間の平均的な肉体力は、（おなじように個々の馬によって相違するところの）馬の力と同様に、科学的目的のために計算されており、そして両者はいまや、非情な力（*inanimate powers*）を測定するのに役立つのである。同様の原理によって、平均的な人間労働または力も確かめられるだろう。そしてこの平均的な人間労働はすべての富の本質を形づくるものであるから、その価値はあらゆる生産物において同様に確かめうるだろうし、したがってその交換価値は他のすべての物の価値との関係によって決定されるのであつ

て、このすべての関係はあたえられた期間不変でなければならぬ。」⁽¹⁶⁾と。

ここでは、オーウェンの労働価値論は、まえばいよりも、はるかに明確になっているとおもわれる。彼は個人的労働とは異なった「平均的人間労働」を意識していたのであり、そしてこの平均的労働は、馬のばあいには、個々の馬によって相違する馬の力が、一つの「馬力」という計算単位に平均化され、機械力の測定に用いられるのと同様に、生産物の価値の尺度として役立つものであることを、説いている。この平均的人間労働の概念は、事実上抽象的、人間労働のやや不明確な把握をしめすものとおもわれるが、もとより彼には商品にふくまれた労働の二重性格の理解はみとめられない。また彼は価値と交換価値とを区別しており、「平均的人間労働はすべての富〔価値と読め〕の本質を形づくるものである」とのべることによって、価値の実体の把握にちかづいているが、それ以上にはすみえなかつた。⁽¹⁷⁾このようにオーウェンの価値論は、リカードのそれにくらべて、ある程度の前進をさえしめしているといえるであろう。

だが、このような人間労働が価値の実体であり尺度であるという理論から、オーウェンはただちに、人間労働が価値標準（価値の外在的尺度したがって貨幣の単位）たるべきであるという議論をひきだす。すでにのべたように、それは価値の内在的尺度と外在的尺度との混同であり、結局は彼における価値形態論の完全な欠如にもとづいてのことである。

(15) Owen, *ibid.*, p. 268.

(16) *Ibid.*,

(17) 平実、前掲書、一九五ページ、参照。

このように、人間労働が価値標準たらしめられることによって、オーウェンによれば、つぎのようなすばらしい展開がひらけてくるのである。「人間労働は、かくして、科学が進歩するともに増大するところの、自然的または内在的価値を獲得するであろう。そしてこれこそはまさに科学の唯一の真に有用な目的なのである。人間労働にたいする需要はもはや気まぐれにしたがうことはなくなり、また人間生活を支持するものは、現在におけるように、たえず「価格が」変動する商業の対象物となることなく、そして労働階級は、野蛮社会または文明社会において、かつておこなわれたいかなる奴隷制度よりも、その結果において、いっそう惨酷な人為的賃銀制度の奴隷とされることはなくなるであろう。」⁽¹⁸⁾「価値標準におけるこの変更は、ただちにもっとも利益ある国内市場をひらき、すべての人々の欲望は十分に満たされるだろう。そしてこの価値標準が存続するかぎり、将来も市場の欠乏からおこるいかなる害悪も存在しえないだろう。それは、国の利益を傷けることなしに、もっとも無制限で有利な、他の国々との交換のための手段を確保するであろう。そしてすべての政府をして現存のあらゆる有害な商業上の制限を取消させるであろう。」⁽¹⁹⁾

「それは労働階級に適当な教育をうける時間と手段とを提供することによって、社会から貧窮と無智とをすみやかにとり除くであろう。労働階級は、過去のいかなる時期におけるよりも、はるかに多くの商業的価値を、自分自身と社会とにあたえるであろう。」⁽²⁰⁾「これらが、自然的価値標準を導入し、もはやその目的に役立ちえなくなった人為的価値橋準を放棄することから、（その変化のための適当な準備がなされるときには、）おこるであろう重要な利益の若干である。」

ここにはたしかに、社会的害悪の根源が主として流通・分配関係にあり、したがって流通・分配手段の変更に

よって、その害悪が除去されうるとする、オーウェンの見解があらわれている。だがそれにしても、最大の害悪は賃銀奴隷制度——いうまでもなく、それは資本制生産関係の基礎である——であるとされており、労働を価値標準たらしめることも、のちにみるように、労働（正しくは労働力）の価値どおりの販売を実現し、さらにその価値そのものを増大させて、利潤を消滅させてゆくというねらいをもっていたものとおもわれる。この点において、オーウェンの思想は、労働貨幣論のエピゴーネンたち——リカード派社会主義者の一部やブルードン（P. J. Proudhon）など——のそれと、根本的に相違するであろう。このようにみれば、価値標準の変更が無際限の市場をひらき、恐慌を絶滅するという彼の主張も、肯かれうるのである。

彼はいう。「労働階級の効果的な、さもなければ有益な勤労を、ひとり阻害するものは、利潤のえられる市場の欠乏である。世界の市場は、ひとり労働階級の勤労にたいしてあたえられる報酬によってのみ、つくりだされる。そしてこれらの市場は、この階級が彼らの労働にたいして、良いあるいは悪い報酬をうけるに比例して、多くまたは少く拡張され、そして利潤がえられるのである。しかし社会の現在の秩序は、労働者が彼の労働にたいして「十分な」報酬をうけるのをゆるさないであろうし、そしてその結果すべての市場が欠乏するのである。」⁽²²⁾

これはさきみたように、⁽²³⁾ あきらかに過少消費説的な恐慌観である。だがその結論は、「最近の科学的改善と、日毎に完成にむかつて前進している他の事柄に比例して、需要を再生しかつ拡張し、また供給の手段を拡大するために、価値の自然的標準「労働本位制」が必要とされるのである。」⁽²⁴⁾ ということだったのである。

(22) Owen, *ibid.*, p. 268.

(16) *Ibid.*,

- (20) *Ibid.*, pp. 268-269.
- (21) 本論文一八ページをみよ。
- (22) *Ibid.*, p. 270.
- (22) 前掲拙稿、一七—一八ページ。
- (24) *Ibid.*, p. 270.

三

「第二部、プランの概略」はつぎのように説きおこされている。「現在の制度のもとにおいては、より多くの労働者が、農業と製造業において有利に雇用されえない」し、また「国の繁栄をもたらすべきもの、すなわち機械のおよび化学的の科学における改善は、人口に、現在の制度が消費することをゆるす以上のものを、生産させる」のである。そこで「結局、消費が生産と歩調を合わせてゆくようになされうるような、新しい秩序が必要になるのである」⁽²⁵⁾。そこでオーウェンは、この目的のために、つぎのような三つの具体的な方策を提案している。

「第一に、プラウ (*plough*) のかわりに、スベード (*spade*) によって、土壤を耕作すること。

第二に、スベード耕作が要求するような変革を、個人にとって容易かつ有利であり、そして国にとって有益なものたらしめるようにすること。

第三に、それによって労働生産物の交換が、富が非常に豊富になって、そのそれ以上の増加が無益と考えられ、そして望まれないようになるまで、阻害されあるいは制限されることなしに進行しうるような、価値標準を採用すること。⁽²⁶⁾」

まず第一に、プラウでなしにスペード耕作を推賞する理由がのべられる。プラウは馬にひかせる犁で粗放耕作を意味し、スペードは手でつかう鋤で集約耕作を意味する。オーウェンによれば、プラウは土壤を堅くすることによって、水分が底までしみ透るのを妨げ、しかも雨期には植物を水びたしにし、乾天には水分を蒸発させて、作物を破滅させる。これに反してスペードは、土壤を軟かくして、水分が底までしみ透るようにし、底土からの養分を作物に供給する。スペード耕作の利益は、ニューカッスルに近いガッテスヘッドのフアラア氏の成功した四年間の実験によって、十分あきらかになつた。すなわち、氏は、スペードによる耕作の費用は、プラウによるそれを、エーカー当りで超過するとはいえ、しかも作物の増大した価値は、耕作の増加した費用を、償つて余りがあるということ(27)を、満足のゆくように証明したのである、と。

かくして彼は、つぎのように断言する。「机上の理論家と経験のない人々には、プラウをスペードに代えることは、進歩の道を逆もどりすることであり、耕作のすぐれた道具を、劣つた道具のために放棄することのようにおもわれるであろう。彼らは、それに要する科学的設備をともなつたスペードの導入が、製造業において蒸気機関がなしたげたよりも、はるかに大きな改善を農業においてうみだすであろうということを、ほとんど想像できない。彼らはまた、プラウからスペードへの変化が、……紡績機械の発明がひきおこしたものよりも、はるかにより広くかつ有益な革新であることを証明するだろうということ(28)を、ほとんど想像できない。」と。

もとより、プラウをスペードに代えよというオーウェンの主張は、技術的には、すこぶる疑わしいものである(29)。しかしともかく彼が、農業においても工業におけると同様の技術的革新の必要性を強調したというかぎりでは、注目に値しよう。

(25) Owen, *ibid.*, p. 270.

(26) *Ibid.*, p. 271.

(27) *Ibid.*, pp. 271-273.

(28) *Ibid.*, p. 274.

(29) ベーアは「これを「とるに足らぬ提案」として一蹴してやる。」(*Beer, ibid.*, p. 174, 訳、二〇九ページ)。

ところでここに、産業革命の真の意義にかんする、つぎのようなすぐれた洞察があたえられている。「蒸気機関と紡績機械との導入」の結果、半世紀のあいだに英国における全人口の生産力は、「十二倍以上に増加」した。「蒸気機関と紡績機械とは、それらがひきおこした無限の機械的発明とともに、しかしながら、それからひきだされる利益よりもいままや大いに重要性においてまさるところの、害悪を社会にあたえている。これらの発明は、富の集積をつくりだし、そしてそれを、これらの機械の援助によって、多数の人々の勤勉によって生産された富を吸収しつづけている少数の人々の手中においた。かくて人口の大部分は、独占者たちの無智とわがままにたいしてたんなる奴隷となっており、そしてワットとアークライトとの名前が知られるようになるまえに、彼らがおかれていたよりも、はるかにより真に頼りないみじめな状態にある。しかしこれらの有名な独創的な人々「ワットとアークライト」は、まさにおこらんとしている、重要な有益な変革のために、社会を準備させる道具⁽³⁰⁾だったのである。」

一見すればあきらかなように、オーウェンは、産業革命による巨大な生産力の発展が、社会の一方の極において資本の蓄積をうみだすと同時に、他方の極において貧困と奴隷状態の蓄積をつくりだしたことを、見破ってい

る。しかもそればかりではなく、ここには、労働者が生産した価値（ここでは富ということばは価値と読んでよいともう）を資本家が搾取していることが、明確なことばでのべられている。さきに見た、労働者は自己の生存費以上の価値を生産することばとあわせ考えるならば、オーウェンの見解は、剰余価値の源泉にかんする搾取説のうちに、分類しうるほどのものであろう。しかも最後に、このような害悪をもたらした生産力の発展こそ、新しい社会をもたらす変革の原動力であることが語られていることは、まさに共産主義者オーウェンの真面目をしめすものといふべきであらう。

ところでオーウェンによれば、「プラウ耕作からスペード耕作への変化」は、「蒸気機関と紡績機械とが、誤った指導によって、つくりだした害悪にたいする唯一の効果的な救済策であり、これらのまたその他の科学的發明に、真の實質的な価値をあたえることのできる唯一のものである。」⁽³¹⁾というのであるが、その理由は主として、スペード耕作が、多くの雇用をつくりだし、人口過剰を解消するところに、求められている。すなわち、スペード耕作は、プラウ耕作のばあい使用される一頭の馬を、八人ないし十人の人間におきかえるのである。⁽³²⁾かくして、現在大英国の農地は六千エーカー（そのうち耕地が二千エーカー、牧場が四千エーカー）であつて、プラウ耕作のもとでは二百万の農業労働者が雇用され、彼らは八百万の人口に食糧を供給している。しかるに、スペード耕作のもとにある六千エーカーの土地は、少くとも六千万の労働者を雇用し、一億人を大いにこえる人口を高度の安楽さで支持するであらう。したがつて、大英国は人口過剰どころか、むしろ人口不足なのである、⁽³³⁾ いうのである。

(32) Owen, *ibid.*, pp. 274-275.

(31) *Ibid.*, p. 275.

オーウェン主義の完成（松田）

(32) Ibid, p. 272.

(33) Ibid, pp. 275-276.

四

つぎに、オーウェンは金という「旧い人為的な価値標準」のかわりに、「人間労働」という「自然的標準」を採用すべきことを提唱している。その理由は、金は、富が、スベード耕作の導入によって、そのように大いに増加したときには、価値標準として、現在よりもいっそう不適當である。そのときには、人間労働は、価値標準として、要求される目的に適合した唯一のものであるからである。⁽³⁴⁾

ここで、オーウェンは、労働者が彼が生産した富のうちの公正なわけまえにたいする正当な権利をもつという思想を提唱している。すなわちいう。「新しい富を創造することができるものは、当然、それが創造した富に値いする。……かく創造されたこの新しい富のうち、それを生産した労働者は、彼の公正なわけまえにたいする正当な権利をあたえられる。そしてすべての共同社会の最善の利益は、生産者が、彼の創造したすべての富の、公正で固定的な部分をもつべきことを要求する。このことは、自然的価値標準が現実の価値標準となることによつて形づくられる秩序そのものにはかならぬ原則によつて、彼にたいして確定されうる。」⁽³⁵⁾と。

オーウェンの主張は必ずしも、リカード派社会主義者——たとえばタムソン (William Thompson) ——にみられるような労働全取権（労働者が自己の労働の全生産物を取得する権利）の要求であるとはおもわれぬ。むしろつぎにみるように、等価交換の原則の貫徹が要求されている点や、またあとの方で、「価値標準として固定すべき

単位あるいは一日の労働の正確な価値」は、「五シリングで買いうる生活必需品と慰楽品にふくまれている富」より以上の価値を代表するといっている点から考えれば、それは、労働力の価値とおりでの販売の要求にすぎないようにみえる。と同時に、オーウェンにとって、価値標準たるべきものが、商品にふくまれている労働量(労働時間)から、いつしか、「一日の労働の価値」すなわち労働力の価値に移行していることが、うかがわれる。

しかしオーウェンの真意はもとより、窮局的には、協同的に生産された富が協同社会の全成員によって取得され、享受されることであった。後述のように、「一体となつた労働と消費と財産、そして平等の権利」⁽³⁷⁾というところが、彼の協同村の根本原則であった。したがって、彼にとつての真の問題は、「労働にたいする公正なわけまえ」の要求ではなくて、さきにみたように、「賃銀奴隸制」の打破であり、資本の搾取からの労働者の解放であった。⁽³⁸⁾そして彼の人間労働本位制は、そのための一手段として考えられたものであった

(34) Owen, *ibid.*, pp. 277-278.

(35) *Ibid.*, p. 278.

(36) *Ibid.*, p. 279.

(37) *Ibid.*, p. 282.

(38) ローゼンベルグは、オーウェンの「新しい富を創造することができるものは、それが創造した富に値いする」ということばと、「生産者は、彼の創造したすべての富の公正で固定的な部分をもつべきである」ということばとが、互いに矛盾するといひ、前者は未来社会でいっさいの富が生産者に帰属することを、後者は過渡期において生産者が産出された富のうち公正なわけまえだけをうけとり、資本にたいし利子を支払うことを余儀なくされる状態をあらわしているといふ(前掲書、三六四ページ)が、オーウェン自身がここでそういう区別をしているとはおもわれない。

オーウェンは、すすんで、交換と媒介物との発展史を回顧し、労働量にもとづく価値ごおりの交換が、直接に労働時間を表示する媒介物——労働貨幣によってなしとげられる、と説いている。「労働を価値標準たらしめるためには、売買されるすべての商品のなかにおける労働の量を確かめることが必要である。このことは、実際上すでになされている。そしてそれは、商業における術語で「原価」(the prime cost)とよばれるもの、または価値をもつなんらかの物品にふくまれている全労働の純価値によって、表示されているのである。」

「純粹の物々交換の原則は、一商品の想定された原価、またはその労働の価値を、ある他の商品の原価、またはそれにふくまれる労働の量にたいして、交換するということである。しかし、発明がすすみ人間の欲望がふえたとき、それは実際のばあいには不便であることがわかった。物々交換は、商業によってうけつがれた。商業の原則は、すべての物品を、最低の労働量によって生産または獲得し、そしてそれと交換に最高の労働量を手に入れるということである。この結果をうるために、一つの人為的な価値標準が必要になった。そして金属が、諸国民の共通の同意によって、この役割をはたすことをゆるされたのである。³⁹⁾」

貨幣を媒介物とする商業の原則は、その作用において、重要な利益と非常に大きな害悪とをうみだした。それは発明を刺戟し、人間の性格に勤勉と才能とをあたえた。しかしそれは人間を利己的にし、人々を相互に対立させ、虚偽と偽瞞とを発生させた。いまや「物々交換と商業との原則の最善の部分を、実践において結合」し、「経験が有害であることを証明した」媒介物をしりぞけるべきである。「社会の進歩におけるこの重要な改善は、すべての物品をそれらの原価で、あるいは公正に確かめうる各々の労働量に関連して交換することによって、そしてこの価値を代表する、かくして真の不変な価値を代表するであろう、そしてただ実質的な富の増加につれて発

行される、便利な媒介物をつうじて相互に交換することをゆるすことによって、容易になしとげられるであろう。⁽⁴⁰⁾」

まず注目されることは、オーウェンの労働価値論が、商品の価値は、その生産に「いやされた労働量によって決定されるべきであり、商品の交換はこの価値どおりの価格においてなされるべきである」という、規範的な性格をもっていることである。⁽⁴¹⁾ このような等価交換の確保にたいする主張は、リカードゥ派社会主義者のうちにみられるが——たとえばジョン・グレイ (John Gray) ——、ブルードンのいわゆる「構成された価値」の議論にもっとも極端なかたちであらわれているものである。労働時間による価値の決定を、ブルジョア社会の内在的法則からユートピア的独断に転化したという批判は、⁽⁴²⁾したがってオーウェンにたいしても適用されねばならぬ。それはまさに、リカードゥ価値論の歪曲のはじまりであった。

ところでオーウェンによれば、このような価値どおりの等価交換は、物々交換においては確保されていた。しかるに貨幣の媒介による商品流通は、この原則を破壊し、不等価交換が支配的となり、そこに利己的な現代社会のいっさいの弊害が生じた。これらの害悪をとりのぞくためには、直接に労働時間を表示する媒介物——労働貨幣——を発行して、諸商品をそれにふくまれる労働量にしたがって相互に交換すべきである、というのである。

(39) Owen, *ibid.*, p. 278.

(40) *Ibid.*, pp. 278-279.

(41) ローゼンムルグ、前掲書、三六二、三六五ページ。

(42) K. Marx, *Das Elend der Philosophie*, Dietz Verlag, S. 69; 哲学の貧困、マルクス＝エンゲルス選集、第一巻、二九

四ページ、参照。

五

労働貨幣論は、オーウェン主義にとつて、「本質的な付加物」であるといわれる。というのは、「一八二〇年以前のオーウェンは、害悪の源泉が、性格形成にかんする謬見と富の悪分配であると信じていた。しかるにいまや、彼は、交換の様式と流通媒介物もまた、社会的悲惨の根元であるという見解を宣伝しはじめたのである。」⁽⁴³⁾からである。

オーウェンの労働貨幣論の前提をなすものは、十八世紀初頭の通貨論争であつた。対フランス戦争の開始にもなう戦時財政の必要にもとづき、産業革命によつて飛躍的に拡大された商工業を基礎として、イングランド銀行券の金兌換停止・紙幣本位制をさだめた一七九七年の銀行条令がだされたのであるが、その結果、地金の価格は徐々に騰貴し、紙幣の購買力は低下したけれども、全然金の基礎のないときにも紙幣が発行されうるといふ新しい経験は、当時の人々によい印象をあたえた。しかるに平和の回復とともに、一八一六年金本位制が宣言され、一八一九年ピールの法令は金兌換再開の準備をはじめべきことをさだめた。あたかも戦後の深刻な不況に見舞われたときであつたので、一部の論者は、それをピールの法令の罪に帰したのである。トーマス・アットウッド (Thomas Attwood) は、このような議論の代表者であつた。彼は、社会の富が増大したにもかかわらず、金を基礎とすることによつて流通媒介物の発行が制限され、拡大された内外商業の要求に応じえなくなつたために、困窮がおこつてきたのであるとし、ピールの法令の撤廃と不換紙幣の発行による通貨膨脹の必要性を主張し

た。⁽⁴⁴⁾

アットウッドの議論は、オーウェンに若干の影響をあたえたが、オーウェンは、リカードの『経済学および課税の原理』から労働価値論を学びとり、自己の経済理論の基礎にすると同時に、一八一七年にみつけたされ⁽⁴⁵⁾たジョン・ベラーズ (John Bellers) の『勤労学校設立の提案』(Proposals for Raising a Colledge of Industry of all useful Trades and Husbandry, 1695.) からも多分に影響をうけて、資本家的なアットウッドとはまったく異なつた、労働者階級的な独自の見解をうちだした。すなわち労働本位制の主張である。

ベラーズは、「勤労学校」、すなわち貧民労働者を結合して農工業をあわせ営む一種の協同組合の提唱者として、オーウェンの協同村の思想的先駆をなすものであるが、同時に労働をもって価値標準となす見解の先駆者でもある。ベラーズはつぎのようにいつている。「政治体における貨幣は、跛の人にたいする松葉杖のようなものである。身体が健全であれば、松葉杖などはかえつて邪魔になるだけである。だから、個人的利害が公共的利害となされたこの勤労学校では、貨幣はほとんど用をなさないだろう。」「この勤労学校の学友は、貨幣ではなくて労働をもって、すべての必要品を評価する標準となすだろう。」⁽⁴⁶⁾と。

(43) Beer, *ibid.*, p. 174. 訳、二〇九ページ。

(44) *Ibid.*, pp. 156-159. 訳、一八七—一九一ページ。

(45) 自叙によれば、この書物は、フランシス・ブレイス (Francis Place) が彼の蔵書のなかから発見してオーウェンに送つたもので、オーウェンはこれを自己の思想の先駆とみとめて、印刷して配布したのである。(Life, p. 240. 訳、下二八四—二八五ページ)

(46) J. Bellers, *Proposals for Raising a Colledge of Industry, Owen's Life, IA.*, p. 165, 164.

このようなオーウェンの労働貨幣論は、たんなる思想にとどまらず、のちにいたって実践されたものであること、周知のとおりである。すなわち彼は、一八二五年私財を投じて、アメリカ、ニュー・ハーモニーの共産村を建設し、三年間の苦闘のち完全に失敗して帰国したが、このときオーウェン主義はイギリスの労働者階級のあいだに滲透し、多数の労働者協同組合がうまれていた。このような協同組合の生産物を、労働貨幣によつて交換するために、オーウェンは一八三二年九月全国衡平労働交換所（National Equitable Labour Exchange）をロンドンにひらき、⁽⁴⁷⁾バーミンガム、リヴァプール、グラスゴーその他にも交換所を設けた。かくして生産者が、平均的労働時間にもとづく公正な評価で彼らの生産物を相互に交換するように、労働時間を表示する労働貨幣が発行された。しかし市場価格が支配している社会の一部で労働価値にしたがって交換をおこなうということはもともと不可能なことであつて、交換所が商人より安く売る商品はすぐさばけたが、より高いものは売れのことた。かくして負債がかさみ、交換所は一八三四年に倒壊したのである。⁽⁴⁸⁾

諸商品は、直接には個別的な私的労働の生産物であつて、その私的労働は交換の過程における全面的譲渡によつて、はじめて社会的労働となるのである。しかるに労働貨幣は、商品にふくまれていた労働時間を直接に社会的なものともみなすのであつて、貨幣とともに商品を、したがってブルジョアの生産の基礎を止揚することになる。⁽⁴⁹⁾もつともオーウェンのばあいには——労働貨幣論の亜流であるジョン・グレイ、プールドン、ロートベルツ（J. C. Rodbertus）らとは異なつて——商品生産とは正反対の「直接に社会化された労働（協同社会における）」を前提している⁽⁵⁰⁾のである。かくしてまた労働貨幣は、資本主義のいっさいの害悪にたいする万能薬ではなくて、社会改革のたんなる第一歩として、考えられていたのである。

(47) 五島茂、前掲書、一七一ページ、参照。

(48) Cole, Working Class Movement, pp. 79-80. 訳、一三八―一四〇ページ。

(49) K. Marx, Zur Kritik der Politischen Ökonomie, Besorgt vom M-F-I-Institute, SS. 73-74. 経済学批判、マルク
ス＝エンゲルス選集、補巻3、八八ページ、参照。

(50) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 99. 訳、二〇六ページ。

オーウェンの労働貨幣論はまた、彼がリカードゥからうけついで労働価値論によって基礎づけられ、いわばその系論として展開されているものである。もちろん、労働価値論からただちに労働貨幣論がみちびきだされているということは、商品の価値がいかにして交換価値となり、それがさらにどのようにして貨幣にまで発展するかを、オーウェンが理解しえなかつたこと、すなわち彼における価値形態論の欠如をしめすものである。いいかえれば、価値の内在的尺度（労働時間）とその外在的尺度（貨幣）とを区別することができず、両者を混同・同視していたことによるものである。そしてまた、労働を価値標準となすことによって、新しい市場がひらけ、雇員がつくりだされ、現在の困窮がとりのぞかれるという思想は、たしかに、現存社会の矛盾を主として流通・分配関係にもとめる、皮相な見解をあらわすものであろう。

しかし、すでにのべたように、オーウェンにとっては、人間労働本位制の提唱は、窮極的には、労働者を資本の搾取から、資本制生産関係の基礎である賃銀奴隷制そのものから、解放することを目的とするものであり、そのための一手段にほかならなかつたのである。彼にとってほどきまでも、共産主義的な新しい社会秩序の創造ということが主眼であつて、労働貨幣はそのための補助的な手段にすぎなかつた。そのいみでオーウェンの労働貨

幣論には、理論的な誤謬とニュートピア的な要素がふくまれていると同時に、将来の共産主義社会における商品生産と商品交換の除去、貨幣の消滅にたいする先見が光っているといわねばならない。

さらにオーウエンの労働価値論は、価値と富との区別さえあきらかでないというような不明確さをもち、また経済法則の把握としてよりもむしろ規範的な性格をもっているけれども、すでにみたように、それは、価値の実体―抽象の人間労働への洞察を秘めているのであり、また搾取説としての剰余価値論への展開をとまなっているのであって、その意味で、リカードゥからマルクスへの発展の、中間の環をなすものといいうるであろう。しかもそれが、労働者の搾取からの、賃銀奴隷制からの解放を目標とする労働貨幣論をその系論としてしていることは、彼の労働価値論の性格をも、基本的に規定するものであろう。

「オーウエンは、リカードゥの価値論から社会主義的結論をくだした、空想的社会主義者のひとりである。」⁽⁵¹⁾ という見解は、かくして妥当なものといふべきであらうし、『ラナーク州への報告』は、社会主義的な労働価値説を明白に宣言した。⁽⁵²⁾ という評価も、けっして過言とはおもわれぬ。労働価値論は、古典経済学においてはブルジョアジーの封建的残存勢力にたいする闘争の理論的武器であったが、いまオーウエンにおいて、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの闘争の理論的武器に転化したのである。それはまさに、労働価値論の歴史的旋回であったといふべきであらう。

かくして『ラナーク州への報告』は、「リカードゥの価値および剰余価値の理論を、資本制生産に抗するプロレタリアートのために逆用」した「全文献」⁽⁵³⁾——リカードゥ派社会主義（Ricardian Socialism）とよばれる、『国民的苦難の根源および救済策』（The Source and Remedy of the National Difficulties, 1821.）ラウエンストーン

(Percy Ravenstone) の『減債基金論』(Thoughts on the Funding System and its Effects, 1824)、『タムソンの『人類の幸福にとって最善の富の分配原理の研究』(An Inquiry into the Principles of Distribution of Wealth, most conducive to Human Happiness, 1824)、『グレイの『人類の幸福にかんする講義』(A Lecture on Human Happiness, 1825)、『ホムスキンの(Thomas Hodgskin)の『労働擁護論』(Labour Defended against the Claims of Capital, 1825)、『ブレイ(John F. Bray)の『労働〔者〕の苦難と労働〔者〕の救済』(Labour's Wrong and Labour's Remedy, 1839)などと同じ——の先駆として、経済学史上にその地位をしめるものと考えられる。

(51) ローゼンムルグ、前掲書、三六五ページ。

(52) Cole, *ibid.* p. 56. 訳、九八ページ。傍点筆者。

(53) Engels, *Vorwort zu Kapital*, II., S. 14. 長谷部訳、一三三ページ。

六

「第三部、プランの詳細」は、オーウェンの協同村建設計画の展開にあてられているが、しかしこの点については、『工場労働貧民救済協会委員会への報告』(一八一七年三月)や一八一七年の書簡や演説(七月二五・二六日、八月七日の書簡。八月一四日、八月二一日の演説。九月六日の書簡、その他)などにのべられたものにくらべて、「統治の方法をとりあつた部分をのぞいて、新しいものはほとんどつけ加えられていない⁽⁵⁴⁾」。「決定的な相違点は、オーウェンがここではじめて、「彼のプランを、『救済委員会への報告』におけるように」たんに失業救済のための対策としてではなく、とって代るべき社会秩序の基礎として詳述している⁽⁵⁵⁾」ことである。ただし、すでにのべたよう

に、オーウェンのプランは、一八一九年に、それが自給自足なのかいなかという点について、トレンズのごときブルジョア経済学者の批判をこうむっていたのであつて、⁽⁵⁶⁾彼はそれに対抗するために、本書において、プランの経済理論的整備につとめたことがうかがわれる。⁽⁵⁷⁾

そこでオーウェンは、新しい施設 (arrangements) の構成を、つぎの六つの点について、順次にあきらかにしてゐる。

「第一に、自分たちと共同社会とに、最大の利益をあたえるように、連合させられる人々の数。

第二に、そういう連合によって耕作される土地の広さ。

第三に、人々の食事、住居、衣服のための、また子供の訓練と教育のための、施設。

第四に、それらの設立物を形成し、管理するための組織。

第五に、剰余生産物の処分方法と他の同種の設立物とのあいだにおける関係。

第六に、これらの施設の、国の政府ならびに社会全体との結合。⁽⁵⁸⁾」

(54) Cole, R. Owen, p. 226.

(55) Ibid., p. 222.

(56) 前掲拙稿、二九ページ。

(57) 五島茂、前掲書、一〇六ページ、参照。

(58) Owen, Life, IA, p. 280.

まず、施設の構成員は、最小限として（自然的な割合における男、女、子供からなる）三百人、最大限として二千人

であるが、しかし八百人から千二百人までが、もっとも望ましい数であることがみいだされるだろう、⁽⁵⁹⁾という。この新施設の基本的性格は、それが「一、体となつた労働と消費と財産、そして平等な権利のうゑにうちたてられた」「連合した共同社会」であるといふことである。⁽⁶⁰⁾

つぎに、そういう連合によつて耕作される土地の広さは、各人の耕作面積が半エーカーから一エーカー半であることが望ましいから、千二百人からなる連合は、六百エーカーから千八百エーカーを必要とするだろう。⁽⁶¹⁾

新施設は、農業を主とし、工業を付属させる。オーウェンはいう。「全人口が農業に従事し、製造業を付属物としてもつならば、一定の地域において、おなじ地域が、製造業人口から分離された農業人口によつてなしうるよりも多くの人々を、はるかに高い安樂さにおいて支持しうるだろう。」⁽⁶²⁾と。みずから工場主であり、そのすべての理論において工場制度から出発したオーウェンが、農業を主とし、工業を兼ね営む協同社会を構想した理由は、すでにのべたように、協同村が、商品生産 \parallel 交換社会のただなかにおいて、主として自給自足的な性格をもたざるをえないことをみぬいていたからであろう。⁽⁶³⁾しかしいっそう重要なことは、オーウェンの協同村計画において、資本主義社会における工業と農業、都市と農村との分離および対立の止揚の展望がみられることであろう。⁽⁶⁴⁾ここにおいてもオーウェンは、人類史の未来にたいする予言者としてあらわれている。

おなじことは、協同社会では労働は娯樂と変らないものとなるという、オーウェンの立言についてもいえよう。彼はいう。「労働階級のためによく工夫された施設においては、彼らは自分自身のために、非常に短い時間に、そして非常に容易かつ愉快に、生活の必需品と慰薬品とをすべて獲得するであろうから、その職業は、生活の合理的な享樂のために、最善の健康と活気のうちに彼らを保つに足るところの、娯樂とほとんどかわらないものと

感じられるだろう。」と。⁽⁶⁵⁾

(59) Owen, *ibid.*, p. 281.

(60) *Ibid.*, p. 282.

(61) *Ibid.*, p. 283.

(62) *Ibid.*, p. 282.

(63) 前掲拙稿「二三ヘージ」。

(64) エンゲルスはいう。「都市と農村との対立の揚棄は、フリーエによってもオーウェンによっても、古来の分業一般の揚棄の第一の根本条件として要求されている。この兩人の意見によれば、人口は千六百人ないし三千人の集団をなして農村に配置され、各集団はその地区の中心である大住宅に住み、家計を共同にしなければならない、というのである。……兩人の計画によれば、社会成員のすべてのものが農業にも工業にも参加する。」(F. Engels, *Anti-Dühring*, Dietz Verlag, S. 364. 反デューリング論、マルクス・エンゲルス選集、第一四卷)と。今日の中華人民共和国における人民公社運動のかがやかしい発展のうちに、われわれは、オーウェンの理想的な形態における実現をみいだすことはできないであろうか。

(65) Owen, *ibid.*, p. 282.

七

第三の考察事項は、住民の食事、住居、衣服のための、そして子供の訓練・教育のための施設である。

住居は、土地の真中に近いところに建てられ、人々がそのうちに連合して住むべき、大きな方陣形あるいは平行四辺形の建物からなる。この建物の四辺は、大人たちのための個人的な居室兼寝室、学校に通っている子供た

ちのための共同的な寢室・店舗・倉庫・旅行者の宿泊所・診療所・等々をふくむ。平行四辺形の真中の空地には、教会または礼拝場・学校・炊事場と食堂などが建てられる。炊事は全住民のために共同的に一つの炊事場でおこなわれる。⁽⁶⁶⁾

ここでオーウェンは、現存社会の指導原理たる個人的利害の原理に対立するものとしての、彼の新秩序の指導原理たる協同の原理を闡明している。

「人間は、彼の個人的な力を、同胞と対立し彼らと競争して發揮するときに、彼の利益が個人的にも全般的にも社会のそれと一致するなんらかの社会的施設によって助けられるときよりも、彼の自身のためによりよくそして公共のためにより有利に、「必需品を」生産しようということが、経済学の理論家たちのあいだで承認された意見であったし、また現在でもそうである。あたかも永久的に公共的善に対立するかのごとき個人的利害のこの原理は、もつとも名高い経済学者たちによって、社会制度の隅石として、それなしには社会が存立しえないものとして、考察されている。しかし彼らが自分自身を知り、そして結合と統一がうみだしうる驚くべき効果を発見するときに、彼らは、社会の現在の秩序が、工夫しうるもつとも反社会的な、愚劣な、不合理なものであることを認めるであらう。⁽⁶⁷⁾」

「この個人的利害の原理から、人類のあらゆる分割が、怒りと憎悪とをうみだす、階級、分派、党派の、そして国民的反感の、はてしのない誤りと害悪とが、そして人類が今日までこうむってきたすべての罪悪と悲惨とがおこってきた。簡単にいえば、もし他のものよりもいっそう真理に反した机上の教義があるとすれば、それは、そのことが現在理解されている意味における個人的利害が、連合と相互協同の原理 (the principle of union and

mutual co-operation)よりも、そのうえに社会制度がうちたてらるべき、万人の、またはなにびとかの利益のために、より有利な原理であるという観念である⁽⁶⁸⁾」と。

オーウェン主義の根底をなす協同原理は、新しい社会秩序の根本原則として、ここに確立された。しかも個人主義社会から協同社会への移行は、いまや、歴史的必然であると主張される。

「経済学者たちが追求している原理は、国民または個人の富をますものではなくて、それ自身貧困の唯一の原因である。」「人類にとって幸福なことには、個人的な相対立する利害の制度は、いまや誤謬と矛盾との極点に到達している——富を創造する豊富な手段のただなかにおいて、万人が貧困であり、あるいは他の人々にたいして貧困がうみだす結果から生じた切迫して危険にあるという⁽⁶⁹⁾。」

このようなオーウェンの協同原理は、さきに見たような産業革命の真意義の把握、すなわち生産力の巨大な発展がうみだした富の蓄積と貧困の蓄積との矛盾、資本による労働の搾取の認識のうえにたつて、この生産力を生産者たちが協同的に支配・管理することの歴史的必然性を主張したところの、社会革命の原理であり、プロレタリアートの根本的要求を反映する、当時においてもっとも先進的な階級的イデオロギーであった。それゆえにこそ、協同原理は次第に、従来急進派^{急進派}の影響下にあった労働者階級の指導分子をつかみ、一八二一年労働者の手によるオーウェン主義の機関紙『エコノミスト』(The Economist)が⁽⁷⁰⁾ミューデー(George Mudie)の編集によって発刊されて、労働者階級オーウェン主義(Workingclass Owenism)の道がひらかれるにいたつたのである。

(66) Owen, *ibid.*, pp. 283-284.

(67) *Ibid.*, pp. 284-285.

(68) Ibid, p. 285.

(69) Ibid, pp. 285-286.

(70) 五島茂、前掲書、一〇七ページ、参照。

ところでオーウェンは、このような協同社会への移行が、彼の性格形成の理論「人間性におよぼす環境の影響にかんする科学からひきだされる知識をつうじてなしとげられるであろう」と主張する。そしてこの「社会の再編成」は、「すべての人々の同意」と「心からの協力によって」、「平和と静穩のうちになしとげられるだろう」という。

だがそれにしてもその変革はきわめて根本的であるので、ある過渡的な段階を必要とする。「環境によって支配されている社会の現状は、社会が環境を支配することを教えられるときに起るであろう状態と、そのいくつかの部分および全体の結合において、非常に異なるので、それによってわれわれが前者から後者へ前進しうる踏み台としての、ある一時的な中間の秩序を必要とするであろう。」この過渡期に、旧い社会のもとに形づくられた習慣、性質、感情は死にたえ、新しい社会状態に適合したそれらがうまれるであろう。労働者たちの精神力と肉体労働との微細な分割はそれらの結合に、私利私害と公共の善との矛盾はそれらの完全な一致に、諸国民のあいだの利害の対立はあいともに増大する福祉の繁栄に、徐々にとって代られるであろう。それは、いちじるしく道徳的な形態においてであるとはいえ、ともかく、資本主義から共産主義への移行における過渡期の必然性の認識であるといえよう。

(71) Owen, *ibid.*, p. 287.

(72) Ibid., p. 289.

(73) Ibid.,

さて、オーウェンはつづいて、住民の食事・住居・衣服・教育および訓練の問題について、詳しく叙述している。まず食事について。「住民の食物は、彼らが一家族ごとくともに食べるであろう、一設備において準備されてる。」「そういう施設によって、これらの新しい連合の構成員は、いかなる個人的または家族的秩序によるよりも、はるかに少い費用でそしてより快適に食物を供給されるだろう。そして人々がひとたび前者の型に訓練され、馴らされる——彼らは容易にそうされるが——ときには、彼らは、そののち、後者にかえるなんらの嗜好をもたないであろう。」⁽⁷⁴⁾

つぎに住居について。平行四辺形の三つの側は、私的な住居によってしめられる。炊事は共同でおこなわれるので、台所は不要である。部屋の通風と暖房および冷房は、全部一カ所に備えつけられた器械によっておこなわれるので、手数と費用とが非常に節約される。⁽⁷⁵⁾

つぎに衣服について。身体を厚い衣類で蔽って空気を遮断することは、身体を虚弱にするのに役立つだけである。ローマ人やスコットランドのハイランド人の衣服のように、ゆるやかで、帯紐を用いず、空気が身体のすべての部分のうえを循環するような衣服が、理想的である。新しい村の男女の子供たちは、こういう衣服を着ることによって、強壯に活動的に育てられるべきである。⁽⁷⁶⁾

(74) Ibid., p. 290. われわれはこの点についても、中国の人民公社のうちに、オーウェンの理想の実現をみいだしうるだろう。

(75) Ibid., p. 291.

最後に、オーウェンがもっとも重視する、教育と訓練の問題について。ここで彼は、彼の性格形成論にもとづく、教育理論を展開している。

「幼児は、彼らが統制力をもたぬ源泉と力とから、彼らがつすべての自然的な性質をうけとるということ、そして誕生のときから、彼らはたえず彼らを取りまく環境からひきだされた印象にしたがっているということ、はあきらかである。その印象は、彼らの自然的な性質と結びついて、生涯の全時期をつうじて個人の性格を真に決定するのである。」

このような知識によって、人々は、児童の性格の形成にたいして、彼らが現在動物の育成にたいしてもっているのと同様の統制力をあたえられ、かくして「人々がいままで家畜の飼育を改善してきたよりもより多く、人間の飼育を改善すること」が可能となるであろう。すなわち、「成長しつつある世代が、人間性に反しないものであるかぎり、人々がそうあるようにと望むどんな性格にでもなりうるように、現存の世代が彼らを統制しうる日」⁽⁷⁾がちかづいているのである。

そこでこのような原則にもとづいて、「子供たちが、あたかも文字通りにすべて一家族であるかのごとくに」、ともに教育され訓練される施設が必要となる。この目的のために、広い運動場をもつ二つの学校が、平行四辺形の内部に、教会と礼拝場といっしょに、設けられる。一つの学校は二歳から六歳までのものであり、もう一つの学校は六歳から十二歳までの児童のためのものである。

「全施設が成功するかいなかは、幼童が、それらの学校において、訓練され教育される仕方に依存するもので

ある。」なぜなら、「人々はつねに、彼らが幼年時代および少年少女時代につくられたところのものであるう」からである。⁽⁷⁸⁾そこでこれらの学校においては、いっさいの報償と処罰と競争の観念を排除することによって、良い性質、習慣、感情を子供たちにあたえるようにつとめ、また退屈な書物による勉強の方法を廢して、知覚される記号〔実物、模型、絵など〕の手段によって、有用な知識を系統的に教えこむべきである。このような方法によれば、子供たちは、容易に楽しみながら、古い制度のもとで幾カ月もかかえたものよりもより多くの眞の知識を、一日のうちに習得するだろう。そして最善の習慣と性質とが、各自のうちに眼にみえずにつくりだされるだろう。⁽⁷⁹⁾かくしてオーウェンは、教育に、最高度の重要性をみとめる。「人々の共同社会^{コムユニテイ}がつねによく治められうるのは、正しく理解された教育によってのみである。そしてそのような教育によって、人間社会のすべての目的は、最少の労力と最大の満足とをもって達成されうるだろう。」

しかも協同村における教育は、生産的労働と結合したものでなければならぬ。「訓練と教育とが、連合における仕事（employments）と、密接に結合してながめられねばならないことは、あきらかである。後者は実に、これらの秩序のもとにおける教育の本質的な部分を構成するであろう。」⁽⁸⁰⁾現在みられるような「労働の微細な分割」は、人々を「肉体的虚弱と精神的低能」におとしられるものにならず、生産的労働と結合した全面的教育によって、子供たちは、「二十歳になるまえに、容易に、人々がいままでに達成したすべての知識の概要についての正しい見解を獲得する」⁽⁸¹⁾であろう。

協同村は、さきに見たように、農業と工業とを兼ね営むのであって、住居の外側には、庭園と道路とをへだてて、広い農場があり、そのむこうに仕事場と製造所とがおかれる。そして各々の連合は、それ自身のために、生

活必需品、便宜品および慰楽品の十分な供給をつくりだすであろう。⁽⁸²⁾ いうまでもなく生産力は大いに発展し、生産される富は尨大なものとなるであろう。「ひとりの個人が、比較的軽度のそしてつねに健康的な仕事によって、いま提案されている施設においてつくりだすであろう新しい富は、実際にはかり知れないものである。それらは彼に、現在労働階級または他の何人かが保有しているものにくらべて、⁽⁸³⁾ 巨大な力をあたえるだろう。」

(77) Ibid., p. 294.

(78) Ibid., pp. 294-295.

(79) Ibid., pp. 296-297.

(80) Ibid., p. 297.

(81) Ibid., pp. 297-298.

(82) Ibid., p. 297.

(83) Ibid., p. 298.

八

第四に、この新施設の構成と管理の問題が考察されている。

このような施設は、「土地所有者あるいは大資本家によって、慈善と公共的目的のための基金をもつ組合によって、救貧税の負担から免れようとする教区と州によって、そして現在の制度の害悪から自分自身を救おうとする農民、機械工、商人の、中流階級および労働階級の連合によって、形成されうる。⁽⁸⁴⁾」と、オーウェンはいう。

最後にあげられた労働者階級の自発的な結合以外に、協同村がいわば上から設立されうると考えられているところに、社会改革の実現を支配階級にむかって訴えてきた、彼の超階級の博愛主義の残渣がみられる。

ともかく、この新施設の導入と普及は、社会にとってきわめて有益な変革を意味するものである、と彼はいう。「もしさまざまな機械の発明が、若干のばあいにおいて、特定の諸個人の外見上の利益のために、労働の力を増したとすれば、他方において、それは多くの他の人々の状態を悪化させた。この機構は、その導入またはそのすみやかな普及によってなにびとも害することなしに、ただちに全社会の肉体的および精神的な力をはかりしれないほどにますであろう、発明である。」⁽⁸⁵⁾

つぎに施設の管理の問題について。「主要な困難は、最初の施設を活動させることにあるだろう。」ひとたび「原理が理解されたならば、立派に正常な能力をもった人は、現在運営されている最大の商業的または工業的設立物のばあいよりも、いつそう容易にそのような施設を管理するであろう。」「最初のばあいには、人々は、園芸、農業、製造業、正常な商業等々の実際の知識にくわえて、それら連合が構成されている原理を理解しうる人を、そしてそれらを理解することによって、それらを実行にうつすことに興味と喜びとを感じうる人を、もとめねばならない。そういう諸個人はみいだされうらうだろう。というのは、提案される実践の個々の部分にはなにも新しいものではなく、ただその組立てのみが新しいものと考えうるからである。」⁽⁸⁶⁾

これらの施設の統治の様式は、それらを形成する当時者たちに依存する。「土地所有者、資本家、公共の組合、教区または州によって建設された施設」は、それらが施設を管理するために任命した諸個人の指揮のもとにおかれ、建設者たちのつくった規則と規定に服する。⁽⁸⁷⁾「中流階級と労働階級とによって建設された施設は、完全な相

互利益のうえにたつており、彼ら自身によって統治されるべきである。」この施設の管理の仕事は、一定の年齢のあいだ——たとえば二十五歳から四十五歳まで——の人々から構成される、委員会によって処理されるべきである。しかし施設の運営が軌道にのれば、管理の仕事はたんなる気晴しとなるし、管理者も数年後にはふたたび被管理者となるから、管理の良し悪しは全員の関心事である。かくして選挙運動の害悪などはさげられる。⁽⁸⁸⁾

(84) Ibid., pp. 298-299.

(85) Ibid., p. 299.

(86) Ibid., p. 300.

(87) Ibid.,

(88) Ibid., p. 301.

第五に、「剰余生産物の処分と、数個の施設のあいだに存するであろう結合」について考察されている。

「提案されている組織のもとにおいては、生産の便宜と、普通の社会においておびただしく存在しているすべての妨害的条件の欠如とは、家事の処理における時間と浪費の節約とともに、他の諸条件が等しければ、大いに減少した支出によって、より多量の富を確保するであろう。」⁽⁸⁹⁾ それでは「どのような方法で、この生産物を処分されるか？」

現在の社会においては、人々は生存の手段を確保するために、個人的利益の追及に窮々としている。「これらの新しい連合は、もっとも単純かつ容易な規定によって、人間性のすべての自然的欲望が十分に満たされることのみいだされまでは、ほとんど形成されえない。そして利己主義の原理は、それをうみだす適当な動機の欠如の

ために存在することをやめるであろう。」

「彼らのあいだでなんらかの評価をもつような種類の富は、彼らのすべての欲望をこえて容易につくりだされるから、個人的蓄積にたいするいっさいの欲求は消え失せるであろうということは、万人にとって明白である。

彼らにとっては富の個人的蓄積は、すべての者が消費しうる以上にこの無価値な液体が豊富に存在するところで、水を瓶につめて貯えることと同様に、不合理なこととおもわれるであろう。⁽⁹⁰⁾」

このオーウェンの思想は、「個人が分業のもとに奴隷的に隷属している状態がなくなり、したがってまた精神労働と肉体労働との対立がなくなるとき、また労働がたんに生活のための手段ではなく、労働そのものが生活の第一の欲求となったのち、個人の全面的な発展とともに、生産力も増大して、協同社会的富のあらゆる噴泉があふれでるようになったのち、——⁽⁹¹⁾そのときはじめて、……社会はその旗のうえにこう書くことができる。——各人にはその必要におうじて！」とのべた、マルクスの共産主義社会にたいする展望につうずるものをもっている。分業への隷属・精神労働と肉体労働との対立の止揚、労働の生活手段から欲求への転化などの思想が、オーウェンにみられることは、すでにみてきたとおりである。ここでもオーウェンは、人類の未来にたいする先覚者としてあらわれている。

(88) Ibid., p. 302.

(89) Ibid.

(90) K. Marx, Kritik des Gothaer Programms, Marx-Engels Ausgewählte Schriften, Bd. II, S. 17. マルクス＝エンゲルス選集、第一二巻、二四三—二四四ページ。傍点引用者。

彼はさらに、この新しい秩序における生産物の交換と分配について、つぎのようにのべている。富の個人的蓄積にたいする欲求の消滅とともに、富の創造にたいする反作用もやむであろう。「その結果として、彼らのあいだにおける精神労働と肉体労働の生産物の交換にかんする困難は、いっさい存在しなくなるであろう。商品の原価を評価する現在の原則のうえに計算された、すべての生産物における労働の量は、すみやかに確かめられ、そしてそれにしたがって交換がおこなわれるだろう。」⁽⁹²⁾「これらの社会を構成する諸個人の、容易な、定期的な、健康的な、合理的な雇用は、彼らが消費したいと欲するであろう量をこえて、彼ら自身の生産物の非常に大きな剰余をつくりだすであろうから、各人は、彼らの必要とするものはなんでも、共同社会の一般的貯蔵から自由にうけとることをゆるされる。」⁽⁹³⁾

こういう連合の一つは、他のものを建設しようとする一般的欲望をうみだすことなしには、形づくられえない。そして諸個人の利害の統一は、各施設のうちにおいて同様に、異なつた施設のあいだにおいても、あたかも、一家族のばあいのごとく、相互に恩恵をあたえあうことになるであろう。

各々の施設において、豊富につくりだされる生活必需品と慰楽品以上に、産出される特殊の生産物は、——各施設成員の使用分をのけ、また万一のばあいにそなえて穀倉と倉庫にいられておくものをのぞいて、なお剰余があるときには、——相互に交換され、各施設の成員にたいして使用対象の多様性をあたえるだろう。「すべてのばあいにおいて、これらの労働が価値の標準であろう。そして、肉体的、精神的および科学的な労働の量における累進的な増大がつねに存在するときには、もしわれわれがこれらの秩序のもとにおいて人口が増加すると想定するならば、おなじ割合で、その大きさがどうであろうとも、社会の全産業にたいする不断の拡張する市場または

需要が存在するであろう。そういう秩序のもとにおいては、術語的に『バッド・タイムズ』とよばれているもの「『恐慌』は、けっしておこりえない⁽⁹⁴⁾。」そしてすべての交換は、労働貨幣によっておこなわれる。「労働の価値の紙の代表物は、それらの対内的商業と交換のすべての目的に役立つであろう。そしてそれは、うけとられ、貯えられた内在的価値の代りとしてのみ発行されるであろう。」⁽⁹⁵⁾

(92) Ibid., p. 302.

(93) Ibid., p. 303.

(94) Ibid.

(95) Ibid., p. 304.

第六に、「新施設の国の政府および旧社会との結合」の問題が、考察されている。

この項目のもとにおいて、国の歳入の徴収と、平和のときおよび戦争のときにおける連合の公共的義務の問題が、とりあげられている。租税は、社会の現存秩序のもとでも、提案されている秩序のもとで、はるかに容易に徴収されうる。政府は、その歳入が法的な流通媒介物によって支払われることを要求するから、連合はそのために必要なだけの剰余生産物を、法的な貨幣とひきかえに外部の社会に売却であろう。

平和のときには、連合は政府になんらの手数もかけない。その内的規制は、公共的犯罪のみならず、いっさいの私的悪行をも防止するから、法廷も刑罰も必要ではない⁽⁹⁶⁾。戦争のときにも、連合はひとしく有用であろう。子供たちの訓練と教育の一部としての身体の運動は、彼らが必要なときには、国の最善の防衛者たらしめるであろう。しかし、「環境の人類におよぼす影響にかんする科学の知識は、すみやかに、すべての国民に、戦争

が悪であることのみならず、愚行であることを発見させるであろう。」人類は、「戦争なしに事態を処理する原理を発見し、実行にうつすまでは、真の合理的な存在とは名づけられえない。」⁽⁹⁷⁾

(96) Ibid, pp. 304-305.

(67) Ibid, p. 305.

最後に、オーウェンは、彼の主張する協同社会への移行の具体的過程を、つぎのようにえがきだしている。

「一生を、社会がこうむっている害悪とそれらをとりのぞく手段との探究についてやしたのちに、そしていまや、その探究の成果である、いましめされた秩序の実行可能性と効果とを証明する事実をもって、実際の実験の長い道程に助けられて、報告者〔オーウェン〕は、同胞の貧困を富に、無智を知識に、怒りを親切に、分割を結合に、かえることを提案する。彼は、この変革が、ただひとり個人を一時的な不便にさえもしたがわせず、おこなわれることを提案する。だれもそれによって、一時間も苦しまないであろう。すべての人が、その導入から短い時期のうちに、本質的に恩恵をうけるであろう。」(なにびとにも犠牲をはらわせずに、社会の変革をなしとげようとする、オーウェンのヒューマニズムは、傾聴すべきものをもたないであろうか。)

「彼の実際の作業は、現在雇用の欠如のために、国の負担となっていて人々からはじめられるだろう。」⁽⁹⁸⁾しかし、「その変革は、現在仕事をうることができないでいる人々の有利な雇用をこえて、新しい秩序が古いそれについて、たいしてもつ非常に大きな優越性の実際の証明からのみ前進するであろう。」⁽⁹⁹⁾かくして、新しい秩序＝協同社会は、たんなる失業対策としてではなく、とって代るべき社会秩序としてしめされたのである。

そして「報告者は、三十年間の研究と実際の経験からひきだされた、『貧民と労働階級の性格を本質的に改善し、彼らの状態を改良し、生産と消費との費用を減少し、そして生産とおなじ規模をもつ市場をつくりだすであろう秩序のもとに、貧民と労働階級に恒久的な生産的雇用にあたえることによって、公衆を困窮から救済し、不満をのぞくための計画』を研究することを、その課題にたいしてもっとも能力ある人々に、よびかける。」⁽¹⁰⁰⁾ということばをもって、この報告書を終っている。

(98) Ibid., p. 309.

(99) Ibid., p. 310.

(100) Ibid.

九

『ラナーク州への報告』は、「オーウェニズムの最重要の論策」である、「オーウェンの著作においてかくのごとき現実性を持ち、社会運動史への圧力をもつたものは比類がない。」⁽¹⁰¹⁾とされている。オーウェン自身本書を至重して、つぎのようにいっている。

「わたしは困窮の諸原因を説明し、……再構成され合理的に編成された社会によって、雇用の欠乏にたいする恒久的な救済策を有利に導入しうる方法の叙述をも、そこにふくませた。そしてこの報告書においてはじめて、わたしは、全人類に有利に性格を形成し・人間性を支配するために、一つの合理的社会制度を構成する科学を説明した。⁽¹⁰²⁾」この報告書は、人類の幸福に必要な真の生活のすべての部門をふくむ、その全範囲にわたった完全

な社会観をあたえたものとして、おそらく最初の発表であった。……かの空想家のフーリエが、長いあいだ調和をつづけることがけつしてできない、新旧の原理と実際とをつきまぜて、実践的な共産制社会をつくらうという考えをおもいついたのは、この報告書が流布されてのちのことであった。⁽¹⁰³⁾

ここでオーウェンがいつているように、フーリエ (Charles Fourier) の「ファランジヤ」(Phalange) の構想が公表されたのは、一八二二年の『家族的農業協同体論』(L'Association domestique agricole) においてであつて、
时期的にもオーウェンに優先権をみとめねばならない。しかもファランジヤにおいては、生産物の分配は、労働にたいして5¹²、資本にたいして4¹²、才能にたいして3¹²というふうにおこなわれるものとされ、資本にたいする分配がみとめられている——オーウェンが新旧の原理をつきまぜていると評したのはおそらくこの点であろう——のであつて、それは完全な社会主義社会とはいいがたい。その点、「一体となつた労働と消費と財産、平等な権利」を原則とするオーウェンの協同村は、資本も利潤もない真の共産制社会である。

かくして、いわゆる三大空想的社会主義者のうちでも、晩年にいたつて労働者階級の立場にたちその解放を目的とするにいたつたとはいへ、終始産業家の支配、すなわち封建貴族に対立するブルジョアジーの支配を説いたサン・シモン (C. H. Saint-Simon) が本来の社会主義者といえないのはもとより、フーリエのファランジヤさえも社会主義社会として根本的な欠陥をもつものであつたとすれば、オーウェンをもつて、「近代社会主義の父」とよぶことは、けつして誇称ではあるまい。実は、「社会主義者」(Socialist) という名称そのものが、オーウェンの原理にもとづく協同村の建設を目的としたロンドン協同組合の機関誌『協同組合雑誌』(The Co-operative Magazine) の一八二七年十一月の誌上で、はじめてもちいられたものであつたのであるから。⁽¹⁰⁴⁾

- (101) 五島茂、前掲書、一〇四ページ。
- (102) Life of Owen written by himself, p. 234. 訳、(下)一七二ページ。
- (103) Ibid., p. 238. 訳、一七九ページ。
- (104) Beer, ibid., p. 187. 訳、二二三ページ。

『ラナーク州への報告』にえがかれた協同社会は、すでにみたように、商品生産と貨幣との除去、人間の分業への隷属からの解放、精神労働と肉体労働との対立・都市と農村との対立の揚棄、労働の生活手段から欲求への転化、そして生産力の無限の発展による無尽蔵の富の生産を基礎とする必要におうずる分配などの諸特徴をそなえた、完全な共産主義社会である。

このような協同村の実践の企ては、早くも本書公刊（一八二二年）の翌年から準備にとりかかったニュー・ラナークにちかいマザーウェル（Motherwell）、アラブラム・コムブ（Abram Combe）が主宰したスコットランドのオービストン（Obiston, 一八二五—二七年）、オーウェン自身が関係したニュー・ハーモニーおよびハムプシャーのクイーンズウッド（Queenswood, 一八三九—四四年）その他いくつもあるが、もっとも重要なものは、一八二五年オーウェンが私財を投じてアメリカ・インディアナに建設したニュー・ハーモニー（New Harmony）であろう。それは翌一八二六年には完全に共産主義的な憲法を制定し、“The New Harmony Community of Equality”と称したが、一八二七年はじめには完全な失敗におわり、オーウェンは失意のうちに帰国した。⁽⁹⁾

もとより、資本主義社会のただなかに、独立した共産主義的な小社会を建設しようとするような企ては、まったく階級闘争の未発展・プロレタリアート解放の歴史的条件の未発見にもとづく空想的思想の産物であるが、そ

の協同社会の構造にふくまれた前記のような科学的予見の萌芽は、人類の思想史においてうけつがれ発展されてゆくべきものであった。その実践だけについていっても、ソヴェト連邦初期のコムムーナや近年のアグロゴロド（農業都市）の構想、とくに中華人民共和国の人民公社のうちに、われわれは、オーウェンの思想の現実的な形態における実現をみいだしえないであらうか。

『ラナーク州への報告』は、また、経済学史のうえでも、重要な地位をしめるものと考えられる。すでにみたところであるが、本書は、平均的人間労働がすべての価値の本質を形づくり、またそれが価値の尺度として役立つという、価値の実体—抽象的人間労働への洞察をふくむ、かなり明確な労働価値論をうちたてており、さらに労働者の生産した価値が資本家によって搾取されているという、剰余価値思想をともなっているのであって、その労働貨幣論も、価値形態論欠如の所産であるとはいえず、賃銀奴隷制の打破を目ざすものであって、本書の経済理論は、プロレタリアートの立場を表現する「社会主義的労働価値論」を基礎とするものと特徴づけることができよう。かくして本書は、リカードの価値論から社会主義的結論をひきだした全文献——いわゆるリカード派社会主義——の先駆をなすものである、とみなすことができる。この書物が、「マルクスに、彼の学説にとつて貴重ないえない示唆をあたえた。」⁽¹⁰⁶⁾といわれていることも、——その論拠は明白ではないが——⁽¹⁰⁷⁾必ずしも誤りとはであらう。

(105) 五島茂、前掲書、一三〇—一四一ページ、参照。

(106) Cole, *ibid.*, p. 56. 訳、九八ページ。

(107) マルクス—エンゲルス—レーニン研究所編『カール・マルクス年譜』によれば、マルクスがはじめてオーウェンを読ん

だのは一八四六年であつて、その後一八五一年および一八七七年にも読んでおり、とくに最後のときにはエンゲルスの『反デューリング論』のために抜萃をつくつてゐるが、第二のばあいには『工場制度（の影響にかんする考察）』、最後のばあいには六冊の小冊子とあるだけで、その他の書名はあきらかでない。（広島定吉訳、五五、一五四、五五三ページ。）しかし『反デューリング論』のオーウェンにかんする記述の精確さからみて、マルクスがオーウェンの主要著作をほとんど読んでいたことは間違ひあるまい。

ただし、『剰余価値学説史』（Theorien über den Mehrwert, M-Lsmus Institut）（第三分冊）の『経済学者たちについてするリカードゥを基礎とするプロレタリア的対立』の章においてとりあつかわれているのは、『国民的苦難の根源および救済策』、ラウヴェンストーン、ホジスキン、およびブレイヤーであつて、オーウェンにはまったくふれていない（S. 5）点からみれば、マルクスはオーウェンを、剰余価値論史上あまり重要なものとはみなしていなかつたかとおもわれる。しかしわたしは、本文のように、それを重視したいとおもふ。

オーウェンの経済学史上の地位にかんして、いま一つ重要な点は、彼が、不明確ながらも、資本制生産を歴史的に規定されたものとして把握しようとしていたと云うことである。彼の『現存秩序』（existing arrangements）と『新しい秩序』（new arrangements）との対立・前者の後者への移行の必然性の強調は、この認識をあらわすものであろう。マルクスは、『経済学批判綱要』（Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie）すなわち一八五七、八年の経済学にかんする手稿のなかで、「オーウェンによる資本制生産の歴史的把握」について語つてゐるが、それはオーウェンの Six Lectures in Manchester, 1837. を素材とするものであるけれども、そのような思想は、オーウェンのうちに、一八二〇年ごろにはすでに形づくられていたものとおもわれる。とくに、のちに見るところの、『困窮原因の解明』（An Explanation of the Cause of the Distress, 1821.）に於て、社会の発

展を經濟關係の光においてとらえるという唯物史觀の萌芽がみられることは、注目すべきであろう。⁽¹⁰⁹⁾

いうまでもなく、資本制生産を社会的生産の永遠の自然的形態とみなすということは、古典經濟学の根本的な科学的限界をなしたものであつて、これを社会的生産の發展における一段階としてつかんだということは、これまたオーウェンが、ブルジョアジーを理論的に代表する經濟学からプロレタリアートを理論的に代表する經濟学への旋回点にたつていたことを、しめすものとおもわれる。

(108) K. Marx, Grundrisse der Kritiki der Politischen Ökonomie, SS. 600-602.

(109) 本論文五三ページをみよ。

このような理論的重要性をもつ『ラナーク州への報告』は、現実にはいかなるとりあつかいをうけたであろうか。一八二〇年五月一日報告書の提出をうけたラナーク州総会は、七人の委員の審査をへて、十一月に委員会の報告が発表されたが、それはオーウェンのプランにたいする確定的見解をあきらかにすることをさけ、「より慎重な審議を要す」とし、ただスピード耕作のごとき個々の改良の実験のみを奨めることによつて、事実上これを不採用にしてしまった。

のちに(一八二二年六月)⁽¹¹⁰⁾ラナーク州の有力者たちは、オーウェンのプランを調査することを議會に請願したが、オーウェン自身がのべているところによると、それはローダーデル卿(Lord Lauderdale)の反対演説によつて阻止された。彼はつぎのようにのべたのである。「諸卿よ、わたしはオーウェン氏をよく知っている、そして彼のプランも、しばらくそれを研究して、知っている。そしてわたしは諸卿に保証する、もし諸卿がオーウェン氏と彼のプランとを是認するならば、ヨーロッパのどの政府も存立しえぬことを。」と。これが請願書の運

命を決し、両院とも否決されたのである。⁽¹¹⁾

マルサスにちかい思想をもった保守的経済学者ローダーデルは、さすがに、オーウェンのプランの本質をよく見抜いていた。それは、プロレタリアートの根本的要求のやや空想的な形態における提示であつて、資本主義社会を変革し、地主階級と資本家階級との権力をくつがえすにいたるであろう。『ラナーク州への報告』は、ここに、歴史の評価をうけたといつてよからう。

(110) Podmore, Robert Owen, pp. 275-276.

(111) Life of Owen, p. 237. 訳「一七七一—一七八一」。

十

すでにのべたように、『ラナーク州への報告』は、オーウェンがその精神的能力の絶頂においてうみだした、もつとも重要な労作であり、豊かな現実性と大きな影響力をもつたものであるが、それとあい並びあい補つて、オーウェン主義の完成を表示するものに、一八二〇年または二二年に執筆されたと推定され、一八二六年から二七年にかけて『ニュー・ハーモニー・ガゼット』(New Harmony Gazette) に発表された『社会制度』(Social System) および一八二一年九月『エコノミスト』(Economist) に発表され、一八一三年に初版をだした『困窮原因の解明』(An Explanation of the Cause of the Distress) がある。この三部作においてオーウェン主義の構築はなつたといえよう。⁽¹²⁾

オーウェンの思想体系の集大成としては、十数年後、オーウェン主義が実践の試練にかけられたのち、最後の

に完成されたものとしての、『新道德世界の書』(The Book of the New Moral World, Part I, 1836, Part II, III, 1842, Part IV-VII, 1844.)があるけれども、それは、一八三四年、オーウエンの旗のもとにはじめて全英国の労働組合をうって一丸とした全、国、労働組合大連合(Grand National Consolidated Trade Union)の崩壊後、労働者階級の運動と絶縁し、ふたたび超階級的協同主義に復帰した晩年のオーウエンの立場から書かれたものであって、労働者階級オーウエニ主義(Working Class Owenism)の没落によって「喪失してゆく現実性の廃墟のうえにたった」⁽¹¹³⁾「抽象的爛熟」を表現するものにすぎない。人類解放の思想と運動の歴史において至要な意義をもつオーウエニ主義の完成は、『ラナーク州への報告』をはじめとする前掲の三部作に集約されているといつてよいのである。

(112) 五島茂、ロバート・オーウエン、二〇一、七ページ、参照。

(113) 同、オーウエン著作史、二七八ページ。

『社会制度』は、完全に共產主義的な立場にたつて、「相互扶助と協同の社会制度」すなわち「平等な労働と平等な分配とをもつ共同社会」の実現を要求し、「社会の唯一の目的は富の蓄積にあると信じている」ブルジョア経済学者たちを批判して、「主要な問題は、生産ではなくて、公正な分配である。」ことを主張したものである⁽¹¹⁴⁾が、その詳細な検討は別稿にゆずり、ここでは『ラナーク州への報告』の叙述を補足するものとして、『困窮原因の解明』をとりあげる。

(114) Beer, *ibid.*, pp. 178-179. 訳、二二四ページ。

本書は三節からなり、第一節は、営利主義経済の批判と変革の必然性を論じている。

「社会の正当な目的は、人間の肉体的、道德的、および知的な性格の改善にある。そして、最少の苦痛と最大

の享樂とをうけるように、もっとも便宜な方法で、人間のすべての欲望を充足することである。」しかし現在の社会はこういう結果をうみだすとはおもわれぬ。「幸福ではなくて、富の獲得」を「主要な目的」とする社会だからである。「かくして、人類の大多数は、激しい、そして不健康で不愉快な労働によって、辛うじて生活必需品をうることができるのに、ごく少数の人々は、過剰な贅沢品を手に入れる、ということになり、」⁽¹¹⁵⁾「その結果、もっとも進歩した、もっとも繁榮すべき諸国民は、いまや、貧困と困窮と犯罪とによっておしつぶされている」のである。

「欲望の充足は長らく、価格による利潤、労働の微細な分割、および個人的利害の競争を基礎とする商業によって、はたされてきた。」⁽¹¹⁶⁾これらの原理に基礎をおく制度も、ある時代には必然であり、有用であったであろう。しかし科学的進歩の圧倒的な影響は、いまやそういう時代を終らせつつある。こういう制度は、もはや長つづきしないだろう。

「労働の微細な分割は、人間の肉体的、精神的な力を分割し、弱めることによって、人類を墮落させてきた。個人的利害の競争は、利害の全般的対立をつくりだすことによって、いまや社会とすべての個人の眞の利益をそなっている。」

「機械的または科学的な発明が知られる以前の未開な時代には、人々の普通の食物、衣服、そしてちよつとした便宜品をつくりだすためにさえ多くの労働を要したから、彼らの自然的欲望はその勤勞の生産物をこえていた……しかし発明と改善によって、人々の自然的欲望がより容易にみたされるようになったとき、人為的欲望が刺戟され、新しい時代がはじまった。商業が、価格による利潤を基礎としてうちたてられ、そして個人的なもうけ

が社会をつうずる支配的な情欲となった。」「個人的なもろけのための価格による利潤と、無益で不要な個人的蓄積とは、人間性のより低級な情欲を活動させた。すべてのものの虚偽の評価がその結果としておこり、そしてすべてのもものは、その内在的なぬうち (intrinsic worth) によってではなく、その費用によって価値づけられるようになった。狡猾と欺瞞とが叡智と真摯との地位をうばった。そしてその結果、金銭の追及において成功したのも失敗したのもすべて、幸福の追及においては悲嘆し失望したのである。」⁽¹¹⁷⁾

(115) Robert Owen, An Explanation of the Cause of the Distress which pervades the Civilized Parts of the World and of the Means whereby it may be removed, First Edition, 1823, p. 1. (British Museum 所蔵本の Microfilm に
422°)

(116) *Ibid.*, pp. 1-2.

(117) *Ibid.*, p. 2.

以上の考察によって知られることは、まず、本書におけるオーウェンの主要な批判対象が営利主義経済、とくに商業であることである。それは、社会的害悪の発生を主として流通関係にもとめる見解ではあるが、商業は、利潤、分業、個人的利害を基礎原理とするものとしてとらえられており、個人的なもろけすなわち利潤追及を起動力とする経済組織こそが、すべての害悪の根源とされているのであって、生産関係がまったく捨象されているとはおもわれない。

つぎに注目すべきことは、オーウェンがここで、社会制度を主として経済関係の光においてつかみ、その発展を生産力の増大の視角から見透していることである。かつては必然的であった経済関係ないし範疇が、生産力の

発展によつていまや揚棄さるべき時点に到達したという見解は、『ラナーク州への報告』においても、労働量にもとづく物々交換↓貨幣を媒介とする商業↓労働貨幣による来るべき交換という図式においてみられたところであるが、⁽¹¹⁸⁾ここではそれが社会経済全体について、すなわち商業と利潤追及を基礎とする社会そのものの過渡的性格の認識として、明確にうちだされている。これは、素朴ではあるが、かなり明白な唯物史観の萌芽であるといつてよからう。⁽¹¹⁹⁾

(118) 本論文一九一二〇ページをみよ。

(119) 五島茂、前掲書、一一九ページ、参照。

オーウェンはつづいてつぎのようにいう。「社会の眞の利益は、供給が、すべてのときに、需要を超過することを要するのに、価格による利潤は、需要が供給と等しいか、またはそれが供給を超過するときのみえられる、ということとは眞実である。ここにこそ、個人的な衝突する利害をこえる、全般的な結合した利害の莫大なばかり知れぬ有利さがみいだされるだろう。」「社会にとって幸運なことには、科学の現在の進歩した状態においては、科学はいま誤った方向にむけられてけれども、需要は供給を超過し、またはそれと等しくはありえないのである。というのは、少数の人々は、正しく方向づけられた科学の助けによつて、多数の人々が消費するよりもはるかに多くのものを、容易に生産しうるからである。生産力は、科学に助けられて、ほとんど無限となつたのであるから。」

かくて価格による利潤は、原則として獲得されえなくなり、それを基礎とする商業制度は、戦争、内乱、悪疫、飢饉のような公共的災厄によつてのみ、ふたたびうまくやつてゆけるにすぎない。⁽¹²⁰⁾

ここで価格による利潤 (profit upon price) とはい、この利潤は需要が供給を超過するときのみえられるというオーウェンの見解は、まったく譲渡利潤 (profit upon alienation) 論、すなわち剰余価値の発生を流通過程にもとめるものである。一方で資本家による労働者の搾取に剰余価値の源泉をみいだす見解をもちながら、他方でまたこのような皮相な立場に囚われているのは、彼の経済理論の弱さを物語るものであらう。

「それゆえに、文明社会を、価格による利潤を基礎とする商業制度によっていま経験されている有害な結果から、そしてこの制度のもとにおいて、科学からひきだされた新供給力によってうみだされた、生産の過剰からおこっている困難から、救うために、なんらか方法が絶対的に必要になっている。」⁽¹²⁾ 「経済学におけるこのおそろしい困難は、社会の現段階において、生産者たちに、あらゆる地位の人々の有利に、容易に生産することのみならず、彼らが生産したもののうちの、いままでもより大きな部分を消費することをゆるすような、予見に基礎をおき、広い経験によってつくりだされた、科学的秩序によってのみ、克服されうる。このことはいまやなされる。……それは、無限の生産をゆるし、それらの抑制されない交換をげますところの秩序——その詳細は筆者の『ラナーク州への報告』においてあたえられている——をつうじてなしとげうるし、また必ずなしとげられるにちがいない。」⁽¹²⁾

要するに、前著とおなじく、現在の困窮を克服するためには新しい秩序——協同社会を樹立するほかはなく、またそれは歴史的必然であるという結論であるが、ここではそれが、『エコノミスト』という労働者の雑誌をつうじて、労働者階級にたいして直接よびかけるかたちをとっているのである。

(120) Owen, *ibid.*, p. 3.

(121) *Ibid.*, p. 4.

(122) *Ibid.*, pp. 4-5.

十一

第二節は、変革の過程と変革後の新秩序としての協同社会についてのべている。

前節においてのべた変革は、現存制度のもとにおけるよりも、生産物をより安く、より健康で快適につくりだしうる、新秩序によって実現される。そういう変革は、まず社会の最下層の人々——窮乏し、悲惨と犯罪との温床となっている人々のための施設をつくることから⁽¹²³⁾はじめられる。これらの秩序をつくる目的は、労働階級の性格と状態および能力を改善することにある。

このような「変革は、しばらくのあいだは、現存の商業制度と競争する方法をとる。」「変革をこういう方法で遂行するためには、現在市場にもたらされうるよりも、すぐれた質のより安い労働をつくりだすことが必要である。というのは、すべての費用は労働に分解するから。もつとも熟練した労働を最少の支出でつくりうると同時に、労働者を最上の健康と最大の安楽さにおいて支持しうるそれらの秩序は、通常の商業の原理のうえで、他のすべての方法を駆逐しうることはあきらかである。」ここで、すべての費用は労働に分解するという、労働価値論の基本命題があきらかにされていることは、注目に値する。

「工業・商業・農業・そして日常生活のすべての用途への、科学のひろくすみやかな応用」から、「そのように広範に、しかし（社会における適当な秩序の欠如のために）今日まで有害に、導入された、科学的改善によつ

て利益をうることを、社会にゆるすために、労働階級のあいだにおける他の照応する変革にたいする必要性がおこってくる。」それらの変革は、「科学からひきだされた新しい秩序を形づくるという目的」に奉仕するものである。⁽¹²⁴⁾

「第一に、現在のいかなる計画よりも、より良く安く、労働階級のための、暖房と換気の装置をもつ、アパートメントを建てること。第二に、労働階級に、より良くより安く、食事を提供すること。第三に、労働階級に、より良くより安く、衣服を提供すること。第四に、労働階級を、より良くより安く、訓練し教育すること。第五に、労働階級に、より良い健康を確保すること。第六に、労働者の労働を、従来よりもより良く方向づけられた科学をともなつて、農業、製造業、その他社会のすべての用途に適用すること。最後に、労働者たちを、あらゆる点において、社会のより良き成員たらしめること。」⁽¹²⁵⁾

⁽¹²³⁾ Ibid., p. 5.

⁽¹²⁴⁾ Ibid., p. 6.

⁽¹²⁵⁾ Ibid., pp. 6-7.

このような変革は容易に遂行されうるし、その実現の手段は豊富に存在している。考慮されねばならぬ問題は、つぎの三つである。第一の問題は、「各人に最小の不便によつて最大の利益をあたえるために、幾人の人々が連合させられうるかを確かめること。」第二の問題は、「いかなる原理のうえに、この新しい連合が形づくらるべきかを発見すること。」第三の問題は、「いかにして彼らのすべての欲望が永久に豊かに充足されうるかを発見し、同時にすべての知識における進歩を確保すること」である。⁽¹²⁶⁾

これらの問題にたいして、オーウェンはつぎのような具体的なプランをしめしている。その構想によれば、五百人から千五百人まで、約三百家族の人々が、一つの大きな建物に共同して住み、その建物は居室兼寢室、公共の炊事場と食堂、学校と教会および礼拝場、診療所、図書室、宿泊所などをふくみ、その中央には運動場、周囲には庭園を設けることが計画されている。⁽¹²⁷⁾

そしてこの施設全体の建設費は四万ポンドと計算されている。その利子は毎年三千ポンドであり、その他の経費をふくむ三百家族の全支出は毎年一万三千五百ポンドと見積られている。しかるに千二百人（そのうち家事や管理の仕事に従う者および病人を除いて）の労働がうみだす価値は、一万九千九百ポンドと見積られるから、毎年五千八百ポンドの剰余がえられることになる。この剰余は、施設の建設に投じられた資本を償還したのちは、人口の増加につれて新施設を設立してゆくために積立てられるものとされている。⁽¹²⁸⁾

(126) *Ibid.*, p. 7.

(127) *Ibid.*, pp. 7-8.

(128) *Ibid.*, pp. 8-10.

以上によってあきらかなように、本書で主張されている新しい秩序は、『ラナーク州への報告』におけるとまったく同様の、協同社会∥共産制社会である。それを協同組合制度とよぶこともできようが、それはどこまでも社会秩序としてであって、⁽¹²⁹⁾ けっしてたんなる部分的組織としての協同組合ではない。したがって本書が協同組合原理の最初の論述であるとされるならば、その意味は新しい社会秩序にかんするオーウェンの思想が、商品∥資本制経済のもとにおける部分的組織の指導原理たりえたかぎりにおいてでなければならぬ。ポッター (Beattie

Potter) が本書を主要な典拠として、オーウェンを「消費組合の精神的父」⁽¹³⁰⁾とよんだことは、誤りとはいえないにしても、消費組合運動がオーウェン主義の正統で十全な継承者とはみなされえないことを忘れてはならない。

もとよりイギリスの、いな世界の消費組合運動の発祥としてのロッチデール組合 (The Equitable Pioneers of Rochdale, 1844) が、オーウェン主義者の主導のもとに結成され、消費組合運動が一般に、オーウェンをその精神的父とみなしてきたことは事実であろう。とくに本書は、従来の彼の論著にくらべて、商業にたいする批判をよくおしだし、協同組合組織による利潤の撤廃を明快に主張した点において、一歩ぬきんでいることはたしかである。ただオーウェンの真意は、あくまでも社会制度の変革にあり、商品＝資本制下における部分的改良になかった——事実彼は一八二、三〇年代の労働者協同組合運動とさえ、労働交換所の設立にいたるまでは無縁であった——ことを、強調しておきたい。

(129) 五島茂、前掲書、一一九ページ。

(130) B. Potter, *The Co-operative Movement in Great Britain*, p. 21.

(131) 五島、同右、参照。

十二

第三節は、新秩序の運用とその利益とについてのべてゐる

「これらの単純な、しかも真に科学的な秩序によって、」利潤は不必要で不利益であるばかりでなく、また不可能となるから、「価格による利潤にもとづく現在の商業制度は終りをつける。」

これらの共同社会においては、生産力は無限に増大し、その成員にたいしてありあまる供給がなされるばかりでなく、それ以上にかんりの量の剰余がつくりだされる。「この剰余生産物を、彼らは、他の同種社会の剰余生産物と、現在におけるように貨幣においてではなく、労働においてそれらの価値を評価することによって、交換するであろう。」⁽¹³²⁾「すべての貨幣取引はまったく不要であろう。これらの秩序のための、彼らの労働は、諸物品が指定された倉庫にひきわたされるときにあたえられる、紙券または領収証以外の他の代表物が必要としないだろう。これらの紙券または領収証は、そういう諸物品にふくまれている労働の正確な量とはつきりとしめすであらう。」⁽¹³³⁾これは既述の労働貨幣の主張の反覆であるが、労働貨幣の性格はここでいっそう明確になっている。

「しかし社会のこの段階さえも一時的なものにすぎないだろう。というのは、万人にとって有利なもつとも単純な秩序によって、可能なあらゆる需要をはるかにこえる供給がなされるから、比較的短期間のうちに、すべての人々はその欲するものはなんでも、なんらかの等価物の介在の必要性なしに、使用しうる、ということがみだされるだろうからである。」⁽¹³⁴⁾したがってオーウェンにおいては、貨幣の媒介による商品流通↓労働貨幣による生産物の交換↓いっさいの流通手段を要せぬ、ありあまる生産物の必要におうずる分配、という流通関係の三段階が考えられていたわけである。

(132) Owen, *ibid.*, p. 10.

(133) *Ibid.*, pp. 10-11.

(134) *Ibid.*, p. 11.

この新しい秩序のもたらす利益はつきのとおりである。

一、労働階級の人々の「肉体的、道徳的、ならびに知的性格」におよぼす大きな利益。

二、一般的利益。

(1)、製造業と農業とが、科学の助けによって今日つくりだしうる、「莫大な量の生産物の適正な分配」という難問題の眞の解決。

(2)、生長しつつある世代が、「貧困に屈従」し「無智」や「悪い習慣と性質」および「同胞にたいする怒りと狭量」におちいることを防ぐこと。⁽¹³⁵⁾

三、特殊的利益。

(1)、現存の世代と彼らの子孫とが、「福祉と幸福とに必要なすべてのものの過多のただなかにおかれるようになるであろう」こと。

(2)、「地球の全表面」が「庭園のように耕される」にいたるであろうこと。

(3)、人々が「活動的で知的にされ」、「慈悲、ふかく、親切」であるようにされること。

(4)、「彼らの実例をつうじて、あらゆる階級、分派、党派の人々が、これらの施設において、有利で賢明で良いことが証明された経験はなんでも、採用するように導かれるであろう」こと。⁽¹³⁶⁾

⁽¹³⁵⁾ Ibid., p. 11.

⁽¹³⁶⁾ Ibid., p. 12.

最後にオーウェンは、彼が提唱する新秩序—協同社会にたいする、ブルジョア・イデオログの非難を反駁して、社会理想を高唱している。「この制度は、人類を墮落させ、奴隷にし、そしてそれを不自然な束縛のもとに

おく傾向をもつと、理論経済学者その他の人々によって、主張されてきた。しかしながら、これ以上に根拠のない虚偽の結論はありえない。そしてこういう見解は、まったく人間性と社会とにかんする無知から生じたものにちがいない。それどころか、この制度のあらゆる部分は、秩序と幸福との社会制度のもとに、人間にとって可能な最善の自由と独立とをあたえようという考えで、古代と近代の歴史と現存の事実との冷静で慎重な考察によって、目的的に注意ぶかく計画されたものである。

そして公共の自由の唯一の確固たる基礎は、「この新秩序におけるごとく、」欲望の完全な充足に、有徳な習慣に、知性に、そしてその結果としての全人口の幸福にみいだされるということは、公衆の心にかつよく印象づけられても、印象づけられすぎるといふことはけっしてありえないである。⁽¹³⁷⁾ 事実、オーウエンのえがきだした新社会像のうちに、人類史の未来にたいする科学的予見がひそんでいることは、すでにしばしば言及してきたところである。そのかぎり、彼が人類の真の自由と幸福とはそこにおいてこそ実現されるとのべていることは、ユートピアンの独断として一笑に付すことはできないであろう。

(137) Ibid., p. 12.

『ラナーク州への報告』、『社会制度』、『困窮原因の解明』——この三部作においてオーウエンの思想体系は完成された。それは、十九世紀の初頭、産業革命の渦中において、資本主義社会はほぼ確立されたとはいえ、プロレタリアートはなお意識的な一個の階級とのて結成されおわっていなかつた段階において、可能なかぎり現実的な共産主義思想であった。空想的社会主義とは、すくなくともオーウエンのばあいには、けっしてそれが恣意的な空想の産物にすぎないということではなくて、目標実現のための主体とそれへの到達手段との認識に欠陥を

もったという意味にほかならないとおもわれる。

たしかに、オーウェンの実践は必然的な失敗の連続であった。すでにみたように、一八二五年私財を投じてアメリカ・インディアナに建設したニュー・ハーモニー (New Harmony) 共産村は、わずか二年にして完全な失敗におわり、帰国後、労働者解放運動の先頭になって一八三二年と一八三四年につくりあげた、全国衡平労働交換所 (National Equitable Labour Exchange) と全国労働組合大連合 (Grand National Consolidated Trades Union) も、前者は経済的必然性により、後者は弾圧と内部分裂によって、いずれも一八三四年に崩壊した。オーウェンが夢みた偉大な変革はけっして一朝にしておとずれはしなかった。資本主義社会はようやく真の興隆期にはいり、プロレタリアートはいまだあまりに未成熟であった。そしてオーウェンは、偉大な思想家ではあったが、けっして革命家ではなく、彼には、なによりも国家権力の存在、したがって政治革命の必要の意識が欠けていた。

一八三四年以後、オーウェンは労働運動からまったく手をひき、オーウェン主義は、労働者に闘争ではなしに愛を説く超階級的博愛主義に墮してしまった。しかし労働者階級は前進をつづけ、やがて一八三二年から一八四八年にかけてチャーチスト (Chartist) の全国的大闘争——それは普通選挙権獲得運動であったとはいえ、すくなくとも暗黙のうちには社会主義を目標とするものであった——を展開した。この闘争のなかでプロレタリアートの理論——とくに政治理論——も成長をとげ、それをつうじてオーウェン主義の精髓も労働者階級によってうけつがれ、やがて一八四、五〇年代にいたって、マルクス・エンゲルスによってあますところなく批判的に攝取されたものと考えられる。

かくして、オーウェンは一八三四年をもって、世界史的には死んだといつてよいけれども、オーウェン主義は

は世界の思想史のうちに生きつづけてきたのである。人類の思想史におけるオーウェンの意義は、なによりも、世界のプロレタリアートに、たとえそれにいたる道をしめしえなかったにしても、彼らの終局目標をはじめて完全^にえがきだすことよって、勝利への展望をあたえた点にあるであろう。そればかりではない。オーウェンは、本稿においてしめそうとつとめてきたように、人類解放の理論的武器としての経済学を、ブルジョアジーの手からプロレタリアートへ、奪いとろうとした最初の人であった。そのかぎり、すべての理論的欠陥にもかかわらず、経済学史上におけるオーウェンの地位は、高く評価されてよいのではなからうか。

（完）